

りて安んじて遊ぶことを得、即ち國中の人皆な朋友なりとして可。或は不虞の變災に遭遇するある。知るも知らざるも、應分の義捐を爲して之を扶け、善事の聞ゆるある、即ち之を褒揚し悪事の聞ゆるある、即ち之を戒飾す。

己れの職とする所を快とし、敢て之を曠くせざる、皆な齊しく稱すべしとなす。

——(實業之世界)——

職業には決して甲乙がない、百姓にしる大工にしる商人にしる皆なこれ社會の要素でその一が缺ければ、吾人は満足に生を

保つことは出来ないのである。如何に百姓が米菜を作つても、之れを衣にかへ器具に更へてくれる商人がなければ立つて行けないと同じく、社會は凡て持ちつ持たれつであるから、お互に他の人に助けられつゝ、自分も又他を助けつゝあるので、如何に卑しい職業だからといつて、決して賤しむべきではない、自からも大に自重して居なければならぬ、要は其職業に忠實であることで、如何に立派な職業と言はれ、已れも又立派と思つて居ても、常に怠つて居ては、功を成し逐げることは出来ない、要するに、職業の好悪は別として、その職に快よく従事して、

飽くまで熱心に、怠りなく盡すといふ事が第一番で、これをこそ、吾人は稱讃し、散幕しなければならぬ。

人類を念とする、是れ志の大なる所以にして、所謂志の大なる者、此を措いて他に有らざるなり。テンネントー！

(想 痕)

吾々五尺の人間を、地球の大に比較すれば、實に大海の一粟よりも小さいのである。然かも、その地球に幾億倍もしたる宇宙、無限大の宇宙に對しては、全然比較することの出来ないほどのものである。

然かるに、此極小の人間が、目前の利を争ふて、孔々として居るに至つては、小も又極の極といはなければならぬ。世に所謂英雄豪傑と言はれるものも、その志に至つては極小なるもので、人類の濟度教養に志すものゝ比ではない。大多数の人類を、無限の時間に渡つて濟度しやうとする心は、志の最も大なるもので、此點に就て釋迦や耶蘇を推さなければならぬ。然し、衆ひを濟度し、世人を感化教養するにも、自から運命があつて、如何に遠大な思想を以つてしても、世に容られない場合も、或は又、全く其人の力量が足りない場合もある。即ち人

力には自から限りがあるのだから、先づ近い所から、小さい範圍から教化して行かなければならぬ。一國で行かなければ一郡一郡で行かなければ一村、一村で行かなければ一家でも好い。兎に角自己の周圍を感化教養して行くといふ、眞面目なる志、それが志の尤も大なるものである。

人の熱心に争ふは、激せる感情を満足し得るや否やにあり

(世の中)

人間は皆な木石でないから、尺度を以て決することが出来ない、是非曲直の容易に判明せられない場合がある。事の是非を

問はないで、徒らに感情に走るの悪いが、もと／＼感情に激するの、當人にとつては最も必要なことで、必要なものは即ち議論に於ける重要な根據である。感情から議論を産み出すことは出来るが、議論から感情を産み出すといふことは、なかなか困難である。

即ち、人生意氣に感ず功名誰か復た論せん、で、感情のために、凡てを惜まないのは人間の通性である。或る者は死を誓ひ利を捨て、決して惜まないのも、要するに意氣に感ずるからで基督が衆生に代はつて磔柱に斃れたといふことは、即ち此の意

氣を示したもので、その評を見聞きして、其後基督の教を信奉するものが、續々嚴刑に處せられても、その後を斷たなかつたのも、實に偶然ではない。

威武に屈せざる人にして始めて威武を備へ、力を振ふに堪ふべく、富貴に淫せざる人にして始めて富貴に居り業を成すに堪ふべし。

——(日本及日本人)——

威武に屈するのは氣力のない輩である。富貴に淫するのは氣醜のない人である。威武に屈したり、或は富貴に淫したりする

民族は、強固な國家を形づくることは出来ない。支那は主權者の更迭が人民と没交渉で、外國からは入つて治めた。印度も治め易くつて屢々外國の支配を受けたことは歴史に見る如くである。之れを歐洲の各國に較べて見ると、歐洲はさすがに治め難い。人民は政府の監督者のやうな態度で、失政があれば直ちに之れを責め、場合によつては力爭する。合衆國などでは。各州幾等が獨立して、總じて一の國家と見做すやうな傾がある。

昔歴山王がまだ位に即かない時分、又王が荒馬を持て剩して捨てやうとしたのを見て「イヤ是れは名馬だ、是れは名馬だ」

と頻りに惜しがつて、自からその荒れ馬を乗りこなして居たが果して後には名馬と言はるゝやうになつて、その馬のために、  
歴山大王は幾度も戦場で危難を免れたさうである。

民族も斯ういふ工合で、威武に屈せない、富貴に淫せない者ばかりであつたら、これを巧く統御さへしてゆけば、国力は益々増進し、國威は四鄰に振ふのである。即ち國の治め難いのは強國としての要素があるからで、人としても、御し難き者は、その御する方法さへ好ければ、寧ろ御し易き者に勝つて居る沈香も焚かず屁も放らぬやうな者では、決して強國の民といふ

ことは出来ぬ。

強き壓迫に堪へよ。

—(實業之世界)—

壓迫が烈しいから如何することも出来ないといふ者がよくあるけれど、何處だつて多少の壓迫のない所はない。壓迫は寧ろ人間生存の上に必要なもので、決して免るることの出来ないものである。免れてはならぬものである。鳥が空中を飛ぶにしても空氣の壓迫を感じるだらうが、若し空氣がなければ飛ぶことは出来ない。又魚が水中を遊ぶにしても、水の壓迫を受けるだら

うけれど、全然水を取り去つたならば到底遊ぶことは出来ない。  
 壓迫のない自由といふものは、殆ど空想に過ぎぬもので、壓迫に堪へ忍び、壓迫に打ち勝つて、何所までも精神を挫げない所に自由があるのである。遠い將來のことは別として、過去や現在や、又近い將來は、自由を得ると自由を得ないといふことは、能く壓迫に打ち勝つと否とにある。自由を最も貴ぶのは、自分自身が自由を作るので、他の力によつて自由にしてもらふのではない。

日暮れて遠きを嘆ずる勿れ。

—(世の中)—

日暮れ途は遠いといふのは、三千年以來の諺である。此の日暮れを一日中の時間と見る外、大抵は年齢が傾いて、安閑と暮すことが出来ないで、その手段を擇ぶといふ意味が多い。實に若い時は春秋に富んで居るが、それを空々に費やして惜まず、やうやく齡が傾くに從つて、一時に年を取つたかのやうに、大慌てに慌て、何事がしなければならぬと氣が付くか、さて其時は既に遅い。

世の中の水平線以下にあつて、上に出やうとする野心のない

職工や小商人は、多少でも金を残して老後を安樂に暮せば此上もない幸福とするかも知れないが、それでは満足出来ない者が少くない。

古から日暮れて途遠しと歎いた者は少くないが、是れは日暮れに近付かない前から心懸けて置かないからで、切めから志望を大きくして早くから準備して置けば、中年の後になつても、決して後悔することはない。

若し又、假令に、已むない事情のために、志望以外の職に従事するとしても、その志望が挫けない限りは、必ず志望を遂げ

るの時機がある。これでもないとするれば、その人自身に、志望を達する能力がない者である。幾等か能力があれば、必ず幾等かの志望を達することが出来るのである。要するに日暮途の遠きを歎じない前に、それ相等の志望に對する準備が必要で、これを歎ずるものは、結局準備がないからである。

富貴に生るゝは幸福なるも、爲めに天稟の能力を伸ばし得ざる者幾人なるを知らず。

——(日本及日本人)——

権門富豪の家に生れるといふことは、人として最初の一大幸

福である。所謂おんば日傘で育てられて、少しの不自由もないこれに反して、貧賤の家に生れたものは、碌に守ってもらへず、投げだされて母の手内職の膝下で泣き寝入りするのが常であるが、この最初の不幸が、後らに至つて大なる幸福を産み出すことが少くない。

富豪権門に生れた者は他力的に自由を得るから、努めて自ら自由を得やうとする必要がない。天稟の壯健な腕を持ちながら、強壯な脚を持ちながら、これを用ひて幸福を得自由を得るの必要がないから、折角の腕も脚も完全な發育を遂げることが

出来ない。頭腦にしてもその通りである。要するに凡ての能力は、百練千磨、苦痛な經驗を嘗めながら、奮闘努力して助長しなければならぬ。此點に於て、貧賤に生れたものが、富豪の子弟よりも遙かに幸福と言はなければならぬ。

歴史を繙いて見ても、後世に傳はるやうな偉人傑士は大抵貧賤から身を起したもので、富豪の出は殆んど稀である。

米國の或る大會社では、事務員は決して富豪の子弟から採用しないで、何所までも貧賤の子弟ばかりを採用するのがあるさうだが、これは、取りも直さず富豪に人となつたものは、社會



に立つて充分なる活動が出来ないといふ見地から起つた方針である。

世界の大勢の促す所、長期計畫を立て、之を實行するに務めざるべからず。

—(想 痕)—

大なる事をするには、大なる勞力と、大なる時間が必要なことは言ふまでもない。然るに、應々事を成すに急なるため、無闇に時間を急いで、結局何の得る所もないのは、好く耳にして好く見受ける所である。

元來日本人は、總て短氣で、事を急ぐといふのは一般の批評だが、強ちさうばかりでない、大なる事は矢張り長期の計畫によつて成し遂げられて居る。今歴史によつて見ても、江戸幕府の根據などは數代によつて成り、水戸の大日本史などは、編輯するに二百年の長日月を要して居る。

國家として、長期計畫の事物が増加するといふことは、言ひかへれば發展を暗示するもので、確かに進歩の徴候と見て差支はない。第一、茲五六十十年前に比して、國家としても長期計畫の事業が増加して居ることは明かである。國家に於ての發展も

個人に於ても同一で、此點に心を須ひなければならぬ。  
 一日だてといふことは、誰れでも卑しむことであるが、立  
 坊のやうに其の日々をのみ過し、昨日もなく明日もなく、全  
 く熱帯地の土人のやうな有様で、これでは發展のしやうがない  
 のである。然し、今日世の上層にあり、又は官海にあつて、是  
 れ等の立坊と同じく、土人と同じ心を以つて、その日々を  
 過して居るものがないとも言へぬ。紳士の立坊、或は金殿玉  
 樓に棲む立坊といはなければならぬ。

獨立といふは善し、然れども、獨行といふは必ずしも善か

らず。

——(實業之世界)——

人は生れ落ちるときから一個の體軀を備へて居て、長ずるに  
 従つて能力も備はり、取らんと欲するものは取り、行かんとす  
 る所には行き、止まらんとする時に止まられるやうに出來て居  
 る。此立派な五體五足を完全に持つて居ながら、人の助けによ  
 らなければ、生きて行くことが出來ないとすれば、實に歎かば  
 しいことである。

自から獨立して、何所まで自力を以つて生きるといふことは

男子として最も痛快事、人として最も意義あることである。けれど、身體は一個として獨立して居るけれど、元をたゞせば両親の身體から別れて出来たもので、家族としての一人であり社會としての一人で、全然他と關係を絶しては宜しくない。必ず協同して、他の人と相共に事に當らなければならぬ。福澤論吉先生は獨立自尊といふことを唱へたが、獨立は好しとして、自尊は自明といふ意味ばかりでもないらしい。自分を卑しむといふことは餘り好いことではないが、己れを尊ぶといふことも又善くない。即ち他を尊むことを知らないで、己ればかりを尊む

のは、畢竟傲慢に落ちる。傲慢の善くないことは茲に言はなくとも、明らかなことであらうと思ふ。人は各自獨立を思ふと同時に、他と與にすると思ふことを考へねばならぬ。獨立獨行でなくつて、獨立同行でなくてはならぬ。

言ふが如く行はば、大過なかるべし。

——(續世の中)——

言行一致といふことは、少々曖昧な言葉であるが、善言善行を指すことに於て始めて始めて意味がある。言が非であつて、行が善

いのは、言も行も悪いのに較べると幾等か好いには定つて居るが、言行一致といふことは勿論悪言悪行ではない。

言ふは易く行ふは難しとは、古來幾多の聖人君子が歎いた所で、なかく容易に言ふが如く行へるものでない。然かも、自から行ふとしないので、口で言ふことと、行ひとは全然違つたものゝやうに心得て居る者さへある。勿論言行一致は難いことであるが、常に心懸けて行ふやうに努めなくてはならぬ。假令必ずしも言行一致が出来ないとしても、その心懸さへあれば、その志は稱するに足るのである。

時代を超出せよ。

—(想 痕)—

時代に後れるといふことを、非常に恐れるものがある。他人に對しても、時代後れであるといふことを唯一の攻撃と心得、常に時代後れといふが、時代に後れざらんがために、己れも努め他人をも叱咤することに於て多少の意味がある。たゞこれを口にするばかりでは何の功もない。

世が進むにつれて、他に先んじて進むといふことは、世が退くにつれて、他に先んじて退くと同じ意味である。世の事は、

すべて一進一退で、必ず進歩するばかりではない。

偉大な力を能く發揮したものは、いづれの時代から見ても、矢張り偉大なのである。凡俗の上に超越して、時代の如何に拘束せられない者こそ眞の大人物で、偉大な人物は必ず時代を超出する、時代に先じるとか、或は時代に後れたものでも、大に稱讚する者もあるが、之れは單に時代に先後したからではなくつて、其時代を超出したからである。

總じて需用の多きは高價なり、之を得るに多くを費やさざるべからず

—(日本及日本人)—

價は需用の高下によつて定まることはいふまでもない。従つて之を得やうとするのには、多くの物を費やさなければならぬ。然るに、自から勉めないで、大なる成功をしやうとか、或は澤山の金を得やうとかするのには、抑も根本に於て間違つて居るので、これでは到底成功のしやうはない。

現下の社會に、生活難の聲は随分高いが、これ等は結局高い代價を拂はないからである。大なる困難に打ち勝たないからである。困難と戦つて、少しも倦まず致々として勉めれば、決して

て生活難も何もない。のみならず、その鞏固なる誠心は、やがて大なる成功に近付くのである。昔から諺に言ふ通り、稼ぐに追ひ付く貧乏なしと言ふごとく、常に大なる努力奮闘を怠らなければ、成功は期して待つべきである。徒らに生活難を口にし現世を悲観する如き者は、病者か、でなければ、懶者である。大なる成功を望まば望むだけ、高價の勞力を拂はなければならぬことを、豫め覺悟して居なければならぬ。

大に爲すことあらんと欲せば、成功失敗を超脱するに若くはあらず。

—(世の中)—

常に成功をしやうと努めるのは好い。又失敗を避けやうとするのも宜い。成功は人の好む所で、失敗は誰れしも之れを惡むが、失敗を重ねた後に成功が來るので、トン／＼拍子に着々と成功するといふことは望まれない、つまり失敗は成功の本であるから、失敗を重ねても少しも屈しないで、飽くまで熱心に、失敗と成功といふことを脱して、自己の務として努力しなければならぬ。

儉と吝とは似て似ざるもの、吝は儉に似て非なるも甚

だし。

—(日本及日本人)—

明治天皇は成申の詔書に、勤儉といふことを御奨励になつて居るが、儉といふこと、吝といふことはよく混同され易い。儉を奨めるには、如何しても儉と吝との區別を教へなくてはならぬ。儉を教へるがために、吝に陥るやうなことがあつては、國家の前途實に憂ふべきもので却つて利益はないのである。

美衣美食を攝るのは奢りであるからといつて、常に粗食粗衣をするといふことは、決して儉の素旨ではない、眞の儉約の本

旨ではないのである。事實上の都合によつて、或は地位の如何によつて、美衣を纏はなければならぬ場合もある。金銀の指環も必要なる場合もある。たゞ其の要不要は自己の身分と、地位の高下に依るのである。如何に儉約が好からといつて、食ふものも食はず、着る物も常に纏ふて居るのは、即ち吝である。僕の知人に……知人には相違ないが毎日御用きゝに來る酒屋の番頭があるが、此男が常に儉約を口にして、其妻をたしなめて言ふに『粗食をして死んだものは未だ曾て一人もないから幾等粗食しても關はない、三度々々漬物で澤山だ』と、これで

は決して儉約ではないのである。成程一見して、粗食したからとて直接に死んだ者はないが、間接に於て死を早め、かんじんの活動力を減少して居ることは勿論で、これ等は正に吝の好手本である。即ち或程度の美食は決して奢侈ではないのである。儉と吝とをよくく辨へて、自から按排して行くといふことは人として最も必要なことである。

苟も費すことを知らざれば、金ありとも猶ほなきが如し。

——(想 痕)——

地獄の里も金次第といつて、金を重寶がつた該は古來少くな

い。先だつものは路用の金で、必要はさて措いて、金が欲しいといふ意味がない。即ち金さへあれば、世間の事は如何でもなるといふ心持ちなのであるが、さて金があつて見ると、果して如何にでもなるかといふと、なか／＼さうは行かない。

明けても暮れても金々とはか言つて、頻りに金を欲しがつて居る屎桶擔に、もしお前に有り餘るほど金があつたら、一體如何する積りかと問ふたら、屎桶擔が曰く、屎桶の輪を金銀でこさへると答へたさうである。

これは極く卑近な例であるが、欲しい／＼といふ者に限つて



多くは此の類である。年來欲求して居た金を、やうやく得たからとて、屎桶の輪を金銀にして何の効があらう。世界の富豪カ  
ルネギー氏は、金を得るよりも費すことが困難であると歎じた  
さうであるが、これは正に眞情から出た言葉であらう。その費  
すことを知らなければ、結局屎桶擔ぎと同一形の者である。  
金を死なして使ふといふことがあり、生かして使ふといふこ  
とがあるが、生かして使ふことは、なか／＼容易のことではな  
い。

自信と自利、自信と狭量、自信と傲慢は混じり易し。

——(續世の中)——

一寸一見すると自信らしく見へて、實は我利々々なる者があ  
る。自から信することが強くつて、如何なる危険に遭遇するも  
乃至如何なる誹謗を受けても、頑として自信を變へないのは尊  
ぶべきことであるが、たゞ自己の利益ばかりを見て、他に什麼  
不利益があらうが、一向平氣で居るなどは、財のあることを知  
つて人のあることを知らないもので、實に唾棄すべきである。  
又、自信と狭量も混じり易いもので、狭量なのを自信と見るや  
うな場合が少くない。自から信する所を言ひ、自から信する所

を行ふことは、決して悪いことではないが、たゞく自分の思ふことばかりが正しいと思つて、他の言ふことには少しも耳を傾けないのは、好んで己れを狭くするもので、好く心しなければならぬ。

尙ほ自信と傲慢も誤り易い一ツである。己れの信ずる所は何所までも屈せず、屈さないのを以つて偉いと思つて、他人を見ること虫虻のやうに思ふのは、即ち傲慢で、自信との間には餘程の相違がある。

自信といふものは勿論必要なものであるが、自信ばかりが必

要なのではない。天上天下は自分一人の爲めにのみ存在するのではないから、己れの欲しないことは他も又欲しないに定つて居る。自利を思ひ、狭量で人の言ふことを容れず、或は傲慢で他人を悔るなどは、丁度薬と毒を一所にして服むやうなものである。

好む好まざるを胸中に秘する者は、とかく人に好まれざる跡あり。

—(想 痕)—

好むと好まないといふことは、複雑な心状態である。時には

特種の癖があるから好まなかつたりして、他人から見ると殆んど不思議なやうなことがある。世に言ふ毛嫌ひといふ奴で、蛇は大底の人がこれを嫌ふが、その實物を好く見ると、鰻よりも華麗な皮紋があつて、歩行する曲線も随分美しい、が、斯く人に嫌はるゝのは、單に毒があるからだとは言へない。何所かに嫌ふべき點があるに相違ない。人と人の好き嫌ひも此通りで何れの點から見ても嫌ふべき理由がないのに、犬猿も只ならぬ者が少くない。

つまり、人を好くといふことは、自分の好む所と相一致する

からで、所謂意氣相投するからである。即ち好み或は嫌ふといふことは、己れも又他人に好まれ、或は嫌はるゝ素質があるからで、萬人に好まれる人は、萬人を好み嫌ひしない人である。誰れをでも好む人は、誰れにでも嫌はれぬ人である。

イエス及びノーは、口外のみ用語にあらず。

——(世の中)——

承諾とか或は不承諾とかいふことは、單に、口外ばかりの言葉ではない。口外に出して言ふと同時に、口内でも言はなければならぬ。承諾或は不承諾の約束は、單に他人に對して重

するのでなく、翻つて自分自身に對して重じなければならぬ。始めから決意がないのなら兎に角、苟も決意をした以上、何所までも屈せず倦まず遂行しなければならぬ。たとへ人に約束したのではないとしても、一旦決意したことを中途で止すのは、取りも直さず自分を欺くので、自分を欺くものは、勿論他を欺くものである。

人は各々他人に好意を持つ、同意を求めて承諾せられなければ、多少不愉快を感じるものである。他人に不愉快を感じさるるといふことは、つまりそれだけ他の幸福をそぐ譯であるが、

承諾すべからざる事を承諾して、却つて迷惑をかけ、或は、約束を破るなどは宜しくない。何れの場に於ても、口外でイエスといふ時には、口内でも、心でもイエスと言ひ得ることではなくてはならぬ。心でノーと思ひながら、僅かの人情にからまれてイエスと答へるなどは、始めからイーといふよりも一層宜しくないのである。

苟も健康を欲せば、須らく積極的に於てすべし。

——(實業之世界)——

遺傳で身體が弱くないかぎり、注意さへして居れば疾病にか

かるやうなことは少いかも知れぬ。即ち炎天に膚を曝さず、傳染病の流行する所に立ち寄らないやうにして、務めて病因なりさうな所を避けて居れば、健康を保つことは出来るだらうが、これは畢竟消極的の健康である。

伊國の皇帝は産れるときから身體が弱くつて、殆んど生存を危ぶまれるほどであつたが、攝生法を變へて、夏日炎熱を冒して運動をし、寒中水に飛び込んで身體を鍛練して、しばらくの後に別人のやうな健康體となられたさうであるが、これが眞の積極的攝生法である。

尤も積極的攝生にも種類があるが、軍人などは戰場に出る準備として、平常から寒暑に堪へ、飢渴に堪へ、運動して疲勞しないやうに慣らさなければならぬ。平和の日が久しく續くと、勢ひ惰氣が長じて、一旦緩急ある場合に狼狽するやうなことがないとも言へぬ。假令軍人でない者でも、身體の鍛練は忽にしてはならぬが、別に寒暑に堪へたり或は飢渴に堪へることよりも、日々の業務に勤勞し得るやうに心懸けてやらなければならぬ。

そして勤勞は往々普通の攝生法と相反する場合がある。普通

には身體と共に精神にも無理をしないやうに努めるが、唯だか  
らうじて生命を保つだけでは、たとへ病氣にならぬからと言つ  
て何の功もない。抑も人の健康は、一つは愉快を得るためでは  
あるが、その快樂は勤勞と相ひ俟つて始めて價値がある。身體  
を鍛練した者が運動して愉快を感じると同様、精神を鍛練した  
者は勤勞して愉快を感じる。勤勞して然かも健康であつて、始  
めて眞の健康である。

即ち一般の人間は、軍人などに身體の鍛練は必要でないが、  
精神の鍛練は優るやうに心懸けなければならぬ。是れは強ち難

事ではない。たゞ不撓不屈に心掛けて居れば、人の頭腦は意の  
ある所必ず道の開けるやうになつて居る。

睡眠は詢に人に必要なるもの、何人もよく睡眠せんことを  
要す。

——(日本及日本人)——

トーマス、カーライルは、エヂンバラ大學で演説して曰く、  
『諸君は健康を以て現世最も價値あるものとなさるべからず  
凡そ世に十全なる健康に匹敵する成功の他にあるなく、千萬金  
といへども之れに比すれば何があるべき、佛國財政家は何故に

睡眠を齧ぐものなきや」と、全く睡眠は何所の市場へ行つても買ふことは出来ないのである。

洵に睡眠は人の健康を保つ上に就て、最も必要なもので、何人も必ず善く睡眠しなければならぬ。然し、時間を長く眠れば好いといふのではない、時間は短かくつても、よく熟睡すれば好いのである。睡眠が長くなると、却つて精神が遅鈍になつて思考を専一とする者にとつては、寧ろ睡眠の足りないよりも害がある。通常睡眠し得る間だけ安んじて熟睡し、餘り過ぎないやうに心懸ければ好い。かの、早寝して朝寝して晝寝して、時

々起きて缺伸する底の睡眠を續けて、眠るが如く覺むるが如くぼんやりとして居るやうでは、健康を害するのみでなく、懶惰性をなして何事も成すことが出来なくなるのである。

彼のナポレオンとグラッドストーンとは共に一生に於て非凡な活動を續けた人であるが、常に眠らうと思へば何日でも眠られ起きて居やうと思へば二日でも三日でも一睡もしないで孜孜として事務を採つたといふことであるが、兩者の偉業も又此意のまゝなる睡眠が與つて力があつたのである。何人といへども、斯く睡眠を意の如くすることは出来ないが、努めて模倣するの

も又悪いことではない。

たゞく、一生を夢となく現となく、覺めるともなく眠るともつかず過すのは、大いに警めなければならぬ。

人事に於て年齢を恃むより果敢なきはなし、年齢は恃むべきものにあらず、恃むべきは努力なり。

—(想 痕)—

年寄の冷水といふことは、餘り賞めることではないが、少壯者が位置を高めんがために老人を攻撃するのは考へものである。此等の少壯者も後ち久しからずして、又他に攻撃せられるのは

明かで、自分では少壯者の積りだが、十年や二十年は束の間過ぎて、國家の事は悉く少壯者の手に歸せなくてはならぬといつた身が、終には少壯者の爲めに老耄と攻撃せられるやうになるのである。

洵に果敢なきは人の身、今若いからといつて、決して年齢を恃むことは出来ない。たゞ己れの唯一の味方として、恃むべきは熱烈な努力である。才の有無は天にあるのだが、努力だけは人にあるのである。努力するといふことは即ち人として人の道を盡すもので、努力して行ける所まで行くのは、人として盡す



べきを盡したので、最も痛快とすべきである。徒らに年齢を待  
み、我は六十だから最う隠居しても好い。俺は三十だから動か  
なければならぬといふなどは、愚も又甚だしいのである。

人爵いよいよ多くして天爵いよいよ貴し。

——(實業之世界)——

明治維新以來有爵者が非常に増加して、現に九百十餘ある。

尙ほ此の外、有位者を數へれば實に驚くばかりの數である。

人爵は斯くの如く、續々として増加するばかりであるが、之  
れと同時に、天爵に就いても考へなければならぬ。日本に於ける

天爵といふ言葉は、孟軻から出て居るので、即ち「天爵なる者  
あり、人爵なるものあり、仁義忠信、善を樂んで倦まざるこれ  
天爵なり、公卿太夫此れ人爵なり、古の人、其天爵を修めて人  
爵之れに従ふ。今の人は其天爵を修めて以て人爵を求む、既に  
人爵を得てその天爵を棄つ、則ち惑へる甚しきもの也。」とある  
が、これ今日明白に意氣を解し得る所で、言ひ換へれば、天爵  
は實力を養ふといふこと、實力を養ふて公卿太夫の位を得、そ  
して位を得てしもうと、最早や天爵を忘れてしまふといふので  
ある。今日此の徹を踏む、正に憂ふべきではないか。

曲學の非なるは斷案の如何よりせず、心と口との一致せざるよりす。

——（日本及日本人）——

曲學阿世といふことは、卑劣であると定まつて居ても、その見解は一ツでない、曲學の曲と言ふ字に重きを置いて、巧にこぢつけて勢力家を辯護するのを指すのもその一、阿世の阿に重きを置いて、世俗の人と相和して、衆愚の意を迎へやうとするのを指すのもある。そして、多く他人を攻撃する言葉で、同時に味方にも使用し敵にも使用される。即ち一方で汝は曲學阿世

だと言へば、又他の一方で汝こそ曲學阿世だといふ、つまり斯うなると、何方が曲學阿世やら解らぬものになつてしまふ。

抑も、曲學阿世の非であるといふのは、心と口と、言ふ事と考へることと、相一致しないからで、心中では是と思ひながらも、自己の勢力を思つて、口では非を説き、又、心中では悪いと思つて居ながら勢力を思つて口では是を説いて、人を欺くからである。人を欺くは因より不徳な行で、全く信を置くことの出來ない奴である。曲學阿世を口にするもの、翻つて自己の心と口に注意することが必要である。

忠君愛國を口にし、帝王の神權を説けば勢力家のお氣に叶ふて、終に勳爵の位を受けるものがないとも言へぬ。これ等は畢竟爵位のために斯くせりと言はれても、致し方はなからう。昔から宮廷に如何はしい者が潜み、コールチアは幫間を意味し、コールテザンは醜業婦を意味するやうになつた。兎に角、特別の事情のない限りは、權門勢家に悦ばれる者は、性格が極めて疑はしいと見て差支ない。御用學者の意見は、勢ひ曲學の最も甚だしいものである。

知らざる所に迷ひ、迷ひを轉じて悟れるを覚え、更に悟り

の迷ひなるを疑ひ、迷悟相ひ逐ひて環の端なきが如し。

——(想 痕)——

不惑といふことの獎勵は、随分上古から行はれて居るのである。孔子は「知者は惑はず、仁者は憂へず、勇者は懼れず」と言ひ、又四十にして惑はずといつた。又孟軻は「吾れ四十にして心動かず」と言つて居る。

佛教などは勿論惑はないといふことを説いて居る。坐臥して常に彌陀佛を一心に唱へるのも、たゞ惑はないやうにと務めるので、其他基督でも回教でもモルモンでも、みな一心不亂に信

仰して、惑はないやうに務めて居る。

然し不惑を奨励すると同時に、必ず惑を奨励する。一般に不惑の聲は聞くが、さて惑を奨励するの聲は殆んど稀であるけれど、元々不惑を奨励するといふことは、惑ふものに對しての事である。知らない事が惑の原因とすれば、人は不惑よりも惑が自然である。此大宇宙には人の知らない所の物が多い。ニュートンが「吾が知り得たるは海岸に立ちて若干の石を拾ふが如し」といつた通り、際限もない廣い海岸に立つて、數限りない石の中から、僅かに幾等かを拾ひ取つたほとしか、人間は知つて居な

いのである。その残りの、知られないのは幾等あるか知れるものではない。であるから、何を見ても何を聞いても、惑はない譯に行かないのである。若しこれを惑はないとすれば、所謂盲人蛇に怖ぢずといつたやうなもの、假令にも目を開けて見るかぎり何を見ても不思議でないものはないのである。知らないものに惑ふのは自然の順序で、釋迦が出家したのは、惑ふてく惑ひつめた結果その惑ひを釋かうとしてゐる。

人が知らない所は、知つて居る所に較べると、前にも言つたニュートンの言葉の如く、極々僅で、此の知らない所は、即ち

惑はない譯に行かぬ。天は茫然として窮極がない。又地の底には如何いふものがあるのか、これも到底知ることが出来ない。地獄があるのだと言はれて、それを否定することも出来ず、幾等か信じるやうな傾向になつて、終には全然信じるやうなことになる。そして、段々智力が進むに従つて、その餘りに輕卒なことを知つて、猶ほ惑ふのである。斯うして、惑を悟つて、悟りを惑ふに、終に盡きる所はないのである。

微菌を驅除するよりも、身體を堅固にするの効力多きが如く、外來の思想を憂ふよりも國民の思想を健全にするに務

むべし。

—(世の中)—

益々發展して世界に對する國民は、發展しないで國內に安んじて居る國民に比して、第一交通は抗まり、凡てに便利を受けただけそれだけ、平調をかき亂される恐れがある。我國はまだ、充分に發展したとは言へない。世界に比べると、ほんの一隅にあるに過ぎないが、翻つて五十年前に較べて見ると、他國の思想はドン／＼入り込んで来て、それが發展の素因となると共に、又大なる弊害も伴つて來るのである。何事にも一利一

害は到底免れないことで、やゝともすると思想上の微菌に犯される。即ち、悉く今までの國家を破壊しやうとする無政府主義などは、最も猛烈な微菌である。

元來微菌といふものは、微力なものであるけれど、虚を衝いて不意に籠から險呑である。僅か顕微鏡の下でやうやく其の形を知ることの出来る微菌でも、大なる人間を倒すのは誠に易々たるものである。年々世界中の人間が、ペストだとか虎列刺だとか肺病菌や、其他多種の微菌のために、食ひ殺される人間は實に莫大な數であらうと思はれる。これ等の微菌を驅除するに

は、色々の方法があるけれど、先づ驅除の方法に先つて、各自に健全なる身體を作り上げて置くことである。健全な身體でありさへすれば、たとへ微菌を呑み込んでも、苦味い胃液は忽ち彼等を殺してしまふことが出来るのである。

これと同じく、思想上に於ける微菌も、健全なる思想さへ持つて居れば、如何に猛烈な微菌でもすぐ殺してしまつて、即ち其の喜を取り悪きを捨て、益々發展の域に達することが出来るのである。

現在の青年は、家に財あれば肉慾を恣にし家に財なければ

生活難を嘆じ、絶へて國家の如何を考へず。

——(日本及日本人)——

悉く今日の青年が墮落淫逸であると言へないが、概して、財産家の子弟は、財あるに任せて淫樂をこれ事とするものが多いのは、恐らく拒むことの出来ない事實である。又財のない、所謂貧賤の家の子弟は、財を求めることが急で、然かも得ることがなか／＼困難であるから、従つて生活難を叫ぶやうな順序になつてくる。

年々世が進むにつれて、生活の程度が高くなるから、勢ひ生

活難も起るのであらうけれど、健康體を有する青年が、生活難を叫ぶといふのは、畢竟生活の程度を誤つて居るからである。己れを知らないから起るので、自己の分に處し、境遇に處して行けば、決して生活難のあらう筈はない。

やがては國家の重大なる責を負つて立つべき筈の今日の青年が、財あるに任せて淫樂を事とし、財なきは生活難に泣いて居ては、國家の前途實に憂ふべきではないか。

と言つて、故らに今日の青年をとらへて、政治運動をしろといふのではない。業務に妨げのないかぎり、演説もやつて見

討論もして見、筆戦を試みるのは、大なる利益があるのである  
たとへ、其の名論卓説を吐かぬまでも、國家を思ふの念がある  
だけでも充分である。

國民思想が頽敗して、忠君愛國を滑稽視して居るのを救ふに  
は、今日の青年に政治思想を持たせ、且つ元老と稱する人々の  
私財を、公共事業に捨てさせるの外はない。晩から早かし列國  
の趨勢に刺戟せられて、如何しても奮起しなければならぬ時代  
が来るだらうけれど、それに先んじて列強に當らんとするには  
豫め準備が必要である。

禮は義務心よりし、詔は奴隸根性よりす。

—(世の中)—

同じ従ふといふ事でも、義務と心得て従ふのと、對手が強者  
であるが故に、或は従がへば自己を利するからと、奴隸的の根  
性から打算して服従するのとは、天地霄壤の差があるといはな  
ければならぬ。孔子は『禮して詔ひすと疑はる』と曰つて居る  
が、禮と詔とは勿論大なる差がある。

義務心は、人として美德の根本であるから、決して須臾も離  
れることの出来ないものであるが、之れに反して、奴隸根性が



なければないだけ、人の品性は高くなるのである。

彼の牛馬が、炎熱の下を追ひ使はれて、唯々として務めて居るなどは、無能無力の人間に比して優ることが幾倍かしない。然るに無能無力の人にも劣るとせられるのは、單に形が畜生であるからではない。その服従が、義務心からではなくつて、鞭を恐れる奴隷的根性であるからである。尤も、時には牛馬にも義務心と認むべき事が無いでもない。戰場などで、負傷した主人を助けるとか、主人の危急を人に知らせるとか、驚くほど事實が應々ある。これ等は、確かに義務心のない奴隷根性の人

間より、遙かに優つて居るのである。

永久より考ふれば、何ぞ必ずしも將來を念とすべけんや、  
況んや區々の現代式をや。

——(實業之世界)——

現代といふ語が盛んに流行的に用ひられて、これを口にしたものは時代後れ、口にするものは時代の率先者であるかのやうに心得て、現代式といひ現代的といひ、盛んに濫用するの傾向がある。

現代式といふのは、以前流行した當世流といふ語ほど強い意

味はないが、又ハイカラといふほど嘲弄の意味もない。尤もハ  
イカラよりは稍や根柢がある。是れが現代式だといふ物に限つ  
て、譯もない物が多いが、之れを解して居るといふことは、ま  
るつきり解して居ないのより遙に好い。文字の上からいふと、  
現代の人と言へば、今現在に存在して居る者で、現代でない物  
は、即ち過去に屬する者である。勿論現代とは、過去と將來と  
に對して、現在に存在しつゝある間をいふのであつて、例へば  
現代史といへば、著者が世間を知つた時から現在までの事を書  
いたものであるが、筆を執る時よりもそれ以前の出來事で勿論

過去の部に入つて居る。又筆を擱いた時には、筆を執つて居た  
間も過去になつてしまふ。斯ういふ風で、嚴密に、むづかしく  
言へば、現代といふものは僅かの一瞬間で、今日現代といつて  
も明日になれば過去となるのである。  
實に、現代式を誇り、現代式を悦ぶ世間は、極く短かいもの  
で、青年の頃熱心に之れを言つて、社會的革命が近い内にある  
なぞと思つて居ても、大抵三十才を過ぎると、殆んど忘れてし  
まう。現代式を誇る者が、將來如何なるかといふことを考へた  
ら、妄りに現代式を吹聴せられないだらう。

現代の物は、將來に於て如何に變化して行くか知れないのである。現在に眞理と言はれることでも、將來は如何であるか解らない。現在に勝ち誇つて居ても、將來に於て降服しなければならぬ場合は少くない。後世恐るべしといふのは全く事實である。

けれど、此將來とても、過去現代の連続したものに過ぎないのである。過去現在未來の區別を超越してこそ始めて人は偉大なのである。現代も將來も、永久の上から見ると何でもないのである。

### 時代思潮に屈從する勿れ。

—(想 痕)—

時代思潮といふ言葉が往々用ゐられるが、その解釋は人々によつて一定しないかも知れないが、文字の上からいふと、その時代の思想の潮流である。如何なる時代でも、思想上の潮流は必ずある。そして、人はやゝもすれば其思潮に屈從しなければならぬと思つたり、或は屈從するのを以つて得々として居る者があるが、これは實に間違つた事である。

時代思潮に従ふのは、即ち時勢に従ふことで、已れの身を安

全にするには利益がある。丁度昆蟲が其の身邊の色と同じやうに自分の皮膚の色をかへて、他の害を避けると同じやうに、社會の一人として、其の周圍と同じくするのは、難を免れる最好の手段で、人は皆思潮に投せんとして日夜孜孜として居るのであるが、已れ一身の保全をのみ計らないで、已れの言はんとする所は何所までも言ひ、行はんとする所は何所までも行ふ勇氣があれば、周圍などに何の遠慮する必要はない。斯ういふ反抗者は思潮の進歩を促すのに最も必要なのである。

時代思潮の勢が熾んで、反抗者の頭を抑へ付ける勢力があれ

ばあるだけ、世の進歩發達を害するもので、之れに反して、時代思潮の勢力が薄弱で、然かも之れに反抗する者が多かつたならば、それだけ時代は活氣を呈して來るのである。であるから自己の安全を思ふに急でないかぎり、務めて時代思潮に反抗して進歩を計らなければならぬ。

尤も、時代思潮に屈従しないのにも二種の原因がある。即ち一は時代より進んで居るが爲めと、一つは時代よりも後れて居るからである。語をかへていふと、頑固黨と急進黨との二種がある。頑固黨のチヨン鬻式は、要するに時代思潮なるものを充

分に會得して居ないから起ること、これは各人注意しなければならぬ。

悲憤慷慨衰へて煩悶起る。

——(日本及日本人)——

悲憤慷慨口を開けば風を起し、雲を捲く底の有様は、何といつても維新前後の時代である。當時は世に成すあらんの志を抱いたものは、みな政治を念として、我こそ大臣參議にならんものと、即ち俗諺にある如く『今の大臣參議は皆書生』てふ心持で、熾に勉強したものだ、愈々社會に出て見ると、事實は

なかくさうは行かない。已れより實力のないものでも、立派な地位にあつて威張つて居る。然かも、人を採用するに情實を以つて、知己とか紹介とかいふやふな順序を採る。實力に於て事實優つて居るものは、不平不満が胸中に鬱勃して忽ち火を吐くやうな勢で悲憤慷慨する。

然るに、議會開説の豫告が出て、憲法が發布され、文官登庸の規則も出て、種々の經驗を積んで來たので、全く悲憤慷慨の跡は断つた。これと反對に、新に煩悶の聲が起るやうになつた。即ち國家的であつた思潮が、新たに社會的或は個人的にな

つた證據である。

強いて性を狂ぐれば、利よりも害を來たすこと多し。

—(想 痕)—

角をためて牛を殺すとは、古ひ諺であるが、事實は新らしく現在の世に往々行はれて居るのである。知らずく、自分では氣が付かないが、事實に於て牛を殺すやうなことは少くない。例へば、繪の好きな小供があつて、本人は如何しても畫家にならなれと思つて居るが、家庭の都合上、總領息子であるから家祖傳來の職業をしなければならぬと、本人が嫌といはふが何

といはふが、家業を無理に仕込んで、天性非凡の畫才を以つて居ながら、平々凡々で居るものが少くない。つい先日、某大尉の娘が、女子美術學校を退學しなければならぬやうになつたので、自殺を企てたことは、世人の耳にまだ新らしい事實で、全く角を矯めて牛を殺すやうなものである。

教育の本旨は、教育勅語にもある如く、智能を啓發し徳器を成就し』とあるごとく、智識や能力を啓くのである。愚人を智人とし、惡漢を善人とするのではない。聰明な人間は教へなくつても聰明である。又不聰明な者は、幾等教育しても不聰明で

ある。即ち智を製造するのではなくつて、各自が持つて居る智識を、段々と増して行くのである。人よりも長じた所を、出来るだけ伸して、又悪い短所を、出来るだけ減じて行くことである。であるから、或程度までは現在の學術教育は必要であるが、それ以上は不必要だと言つても好いのである。

先づ父兄に進言して、然る後に子弟に及ばざるを得じ。

——(世の中)——

現今の學生や青年の風儀が非常に頽れて、之れが矯正を叫ぶ者が日々に多くなつた。その主張する所から察するに、改善の

方法として、二ツの意見があるやうである。即ち、一ツは、今の教育は重に智育に偏して居て、徳育が缺けて居るから、従つて、智識もあり技倆も人に勝れて居る者でも、品性に於て非常に劣等であるといふのと、一つは、現今青年女子の風儀が甚だしく亂れて居るが、若し一層甚だしくなつたら、終には救ふことが出来なくなるから、宜しく従來の弊習を一掃して、行爲を正格にするやうにさせなければならぬといふので、兩者とも、先づ大同小異で、つまり品性を高くすれば行爲も正格になる譯である。

然し、今日の青年學生の風儀が、果して頹廢に傾きつゝあるかといふに、之れも第一疑問である。昔の漢學塾の子弟なども随分淫逸に耽つたもので、就中醫者の子弟なぞとては、實に著にも棒にもかゝらぬのが多かつた。と言つて、昔しに淫逸な者があつたから、現今もあつて關はないといふのではない。何れの世にも多少の屑はあるのだから、大に進善の道を構じなければならぬ。

で、此淫逸なる風が起るといふのも、その因つて起る所は、彼等學生自身が産み出すのでなく、他から注入されるのである

つまり他の眞似をするのである。さなくとも、人生の最も誤り易い時機であるから、赤にも青にも最も染りやすい。そして其染める原料はと言ふと、彼等の先輩や或は父兄のすることを自然に見習つて、終に眞似をすることになるのである。

青年學生の風儀の頹廢は一日も忽にすることは出来ない。そして、之れを充分にするには、社會全般に渡つて、改善しなければならぬ。即ち彼等の風儀が亂れる素因となるべきものを大に改善しなければならぬのである。

人の世に處する、翹に進むの難きに非ず、退くも亦た難し。



風雲急にして、一朝事があつた時に名を揚げるのもなかく、容易なことではないが、退いて終りを克くするといふことも亦た難しい事である。一朝事ある時には、餘り大した人物でなくつても、巧く機に投じて偉効を立てることは随分多い例であるが、その終りを見ると、實に哀れなのが少くない。大西郷などの進退を見ると、その一進一退をなかく軽々しくしない。進む時に大きいと共に、退くのも實に大きい、兵を擧げて海外に押し渡らんと、熾んに口角風雲を起したが、終に議が容れら

—(實業之世界)—

れなかつたので、斷然官を辭して故山に歸つて、犬を連れて狩獵に耽つたり、或は山野を開墾したり、又自分で馬を飼つて肥料を擔いたりなど、周囲の子弟にも勸めて力をさういふことに用ひさせるやうにし、私學校を興して私財を投じて子弟の教育に務めたり、數へ來れば随分あるが、斯うしてその一進一退に大なる足跡が残つて居るのである。偉人といひ英傑といひ、みなその跡には何物かが遺されて居るのである。

百年の苦樂汝自らに依れ。

—(世の中)—

支那の白樂天と云ふ詩人が女を詩つて「百年の苦樂他に依る」と云つたが、女ばかりではない、今の世の中はナンでもエンでも苦樂を他に求めてゐる傾向である。

此世に生れて、誰でも苦勞をしやうとする者はない、樂がしたい、愉快に暮りたい、決つてる話である。然しながら世の中は苦勞をしたくないと云つても苦勞が生ずる。樂がしたいと云つても中々樂が出来ない。何故なのであらうか。要するに苦樂を他に求めてゐるからである。金に依つて愉快を味はふと思ふから、金のない時には苦痛を感じる。美衣美食に依つて快樂を得

やうと思ふから美衣美食が得られぬ時は不快に感ずる。女色を漁ることに依つて樂しみを取らうとするから、もし女色を自由に漁り得ず、もしくは失戀とか云ふやうな苦痛をも感ずるやうな結果を來すのである。これではいけない。即ち快樂を他に求めるから不可いのである。

苦樂は自からにある。然り、自からの心にある。百年の苦樂自からに依れと云ふのは即ち此の事である。金で愉快を得やうなどとは思はぬから、金が自由にならぬからと云つて決して不快には感じない。女に依つて快樂を味はふと思はぬから失戀煩

悶するやうなことはない。

苦樂は心の對象である。苦しいと思ふのは心の持ち方一つである。楽しいと思ふのも心の持ち方に依るのである。掌を翻がへせば雨ともなり雲ともなる。見方の如何に依つて、心の持ち方の如何に依つて、苦樂と云ふことが起るのである。百年の苦樂汝自からに依れと云ふのは、此の邊の消息を教へたものである。

不平は實である。

—(世の中)—

不平は誰でも無くてはならぬ實である。然らば不平とは何であるか、現狀に満足が出来ないのである。もつと向上しやうとするのである。絶えず進むべく心がけるのである。だから不平は實である。

不平のない者はいつも現狀に甘んじてゐるものだ。だから進歩がない。發展がない。向上がない。やがて退歩である。やがて中絶である。

然し、たゞ徒らに不平を不平として、他を恨んだり、羨やんだり、妬んだりしてはいけない。左様不平は實でも何でもない

尤も完全ならぬ人間のことであるから、恨めしいこと、羨やましいこと、妬ましいこと、それがないとは言はぬが、怨んで怨み通してはいけない。羨んで羨やみ通してはいけない。怨み損羨やみ損である。その怨みを晴らさなくてははいけない。その羨やましい位置境遇に到達するやうに心がけなければならぬ。かくて始めて不平な人の進歩向上を助けるものである。なくてはならぬ寶である。

現狀に満足しては不可ない。境遇に壓迫されてはいけない。運命に盲從屈眼しては不可ない。盛に不平を唱ふ可しである。

そして不平を鞭達して、不平を晴らさなくてはならぬ。然し、不平を晴らすと云ふのは恨みある人の家に火を付けることではない。憎いと思ふ人の頭を殴り付けることでは尙更ないのである。不平を晴らすと云ふのは現狀に満足せずに進歩發達を心がけることである。不満足な境遇を切り拓いて満足な境遇を作ることである。

贅澤は愉快ではない。

—(實業之世界)—

人間は愉快に日を送るがよい。不愉快な日を送り迎へするの

は誰でも望ましいことではない。然し何が愉快か、何が不愉快か、その標準はどこに置くか。

自分が自から愉快だとおもつても人が見たらさうでないかも知れぬ。當人は自から不愉快だとおもつても人は愉快だとは思はぬことがある。酒も飲まず煙草も吸はず、聖教徒のような正しい生活は世間普通の人が見たら詰らないものかも知れないが然し當の牧師宗教家は然も尙ほ愉快に感謝しながら日を送つてゐる。職工、労働者が汗水流して一日七八十錢の賃金を得て、晩飯の膳に安酒を飲んで陶然と酔うて歌ふのは、金に不自由の

ない人にはさぞ詰らなからうと思ふかも知れぬが、然し當の労働者は至樂至快、無限の味を認めてゐるのである。

金があつて佳い肴を食ひ、美酒を呑み、美しい女を自由にすれば、それは愉快であらう。然し美酒佳肴も馴ればうまくなくなる。美人も毎日そばにゐれば遂には鼻について来る取り替へてもとり替へても限りがある。浦島太郎は龍宮城で美しい乙姫と日々夜々の酒宴に歡樂のありたけを盡したけれど、それでも尙、住の江の岸の漁夫の家の方が戀しくなつて来たではないか。

榮華を盡し、贅澤をしようと云ふことは決して愉快ではない。贅澤をして愉快を感じるのはまだ人間が小さいからである。口腹耳目を慾を愉快としてゐる内は人間まだく大人物とは言へない。まだく愉快不愉快を自分の周囲にのみ求めてゐては、決して本當の愉快を味はつたものとは言へない。本當の愉快は心の内にある。自分を離れて人の爲に盡す所に味はれひられる。

部分的に悲觀し全體に樂觀せよ。

——(日本及日本人)——

悲觀は病的であるかも知れない。然し悲觀し煩悶し、そうして改善進歩を計つて行かねばならぬのは、個人的にでも、團體的にでも、必要である。

樂觀は淺薄であるかも知れぬ。然し悲觀ばかりしてゐて煩悶苦心、徒らに空しく手を束ねて處決に苦しんでゐるよりは、大に樂觀して大に働らいた方がいい。

然し樂觀悲觀も自分の一身、自分の事業にばかり關係したところでは甚だ面白くない。自分の都合がいゝから樂觀し、自分の都合がうまく運ばぬから悲觀する。これでは何でもない、何に

もならない。愉快だらうが不愉快だらうが他人の知つたことではない。

だから樂觀必ずしも有り難くない。悲觀必ずしも排斥すべきではない。已れさへよければ一生安樂である。世間がどうしたつて自分に影響はない。自分が安樂だから樂觀してゐると云ふのは我儘な樂觀である。それで差支ない人生ではあるけれども他人は少しも預かり知る所ではない。有りがたくはない。是に反して、自分はどうなつても構はない、たゞ國威の外に延びないのを憂ふる。世道人心の頹廢するのを心配する。如何にし

て内政を處理すべきか。如何にして外國に對すべきか。と云ふことに就て都合的には悲觀すべきことは澤山ある。この悲觀を將來の希望につないで、そうして改善進歩に努力し、内政外交の手段方法を講ずるのは全體に於て樂觀である。

國家といはず、個人の事業といはず、部分部分の悪弊損害といふやうなことは悲觀して、之を改善するに努めるのは、全體に於て、國家個人の盛大を豫期した樂觀であると思ふ。

國家にも個人にも、悲觀すべき困難はどん／＼ある。然も困難が多くして漸次發展向上の域に進むのは當然の理でもあるし

又しかく努めなければならぬ。だから部分的には悲観しても、全體に於ては樂觀すべきである。部分的の悲観の材料を驅逐して、全體的の樂觀の域に進むべく努めなければならぬ。

損になることはしない方がよい。

—(實業之世界)—

今日の社會には女郎買をする獨身の青年を非難するの權利はない。これを制止する法律もない。然し、青年は出來うる限り情慾を節してかう云ふ不潔な場所に近づかぬやうにしなければ損である。損なことはしない方がよろしい。

長いものには捲かれろと云ふ、泣く子と地頭には勝たれぬと云ふ、むやみに我は顔して出しやばるのは損である。損なことはしない方がよろしい。

力もないのに自分の意地を徹さうとする、力があつても時場合も考へずに自分の意地を通さうとする。遣り損へば笑はれる。遣り得た所でよくは言はれぬ。損である。損なことはしない方がよろしい。

朝寝をするのは損である。大酒を飲むのは損である。賭博に耽るのは損である。女に溺れるのは損である。損なことはしな



い方がよろしい。

煙草を飲めば呼吸器を痛める。損であると思つたら爲さぬが  
いい。呼吸器を痛めてもそのうまさには代えられないと云ふな  
らば、敢て禁煙せなくもよい。酒もさうである。女もさうであ  
る。損があつても、その快樂を味はふ時の心持ちのよさには代  
えられないと云ふならば、敢て禁酒、禁煙、禁色などと四角ば  
らなくもよい。

誰も自からスキ好んで損をするのではない。損なことはせぬ  
がよいと云ふことは誰でも先刻承知の話である。然も尙、損と

しりつゝ爲さねばならぬ場合もある。かつて世話になつた人が  
零落して助けを請ふたのに、損をするからせぬと云ふのは人情  
ではない。戦争に出る。國家のためだと云つたからとて、自分  
の生命を捨てるのは損だからと云ふ者はあるまい。

損なことはせぬがよい。然し時と場合とを考へなければなら  
ぬ。

元氣ある者は勝者たり得べし。

——(實業之世界)——

人間、何をするにも元氣がなくなつては駄目である。相撲なん

ぞを見ると、もう一月も前から今年は彼奴は元氣がある……と新聞に書かれるやうなのが、きつと成績がいい。元氣は、人間の成功不成功のペロメートルである。

元氣のある者には、その周囲が引ずられてその成功を助けるやうになる者だ。あいつはいつも元氣がいい。ちつとも悲觀してゐない。氣持のいい男である。資本を供給してやらう。新智識を與へてやらう……と云ふやうなことになるものだ。火事の時なぞによく耳にする例だが、弱い女が、平常はとても動かすことの出来ぬ重い荷物を平然として背負つて出る。一生懸命の

元氣である。元氣ある者は必ず何事をか爲しえられるのは、これを以ても察することが出来ると思ふ。

元氣は自己の力を信することに依つて生ずる。何の糞！こんなことが出来なくつて如何するものかと、一生懸命になつて見玉へ、世の中に出來ない者はない。聖人が志のある所に必ず道ありと云つたのは此の謂である。

元氣のない者には何ことも爲し得ない。あいつは厭に青い顔をしてゐる。いつも元氣が無いぢやないか。あんな奴に何が出来るもんかと云つたやうな譯で、職業の紹介を頼まれても力を

いれて世話をしやうとする者はない。況して資本を出して一と働らきさせやうなどと云ふもの有る譯がない。従つて一生不遇、録々として世を終るのである。

元氣を出せ、元氣を出せ、北條時宗の元氣はついに、十萬の元軍を水の飽と消えさせたではないか。秀吉の元氣はついに草履取から關白にまでなつたではないか。元氣なるかな、元氣なるかな、元氣のある者は何でも遣り遂げることが出来る。

天地は悉く力である。

——(日本及日本人)——

柳は緑、花は紅、夏は暑く冬は寒く、秋の月の色、紅葉の錦たゞ偶然にあるのではない。みなこれ天地の力の現はれたものであると思ふ。

人に財産の力がある。然し、親の遺産を相続したのでも、自分の努力勤勉から作りあげたのでも、その根原は何であるか。その財産となる土地山林畑邸宅、乃至は會社事業銀行業、その根本をたづねれば何れかこれ天地の力でない者はない。

人に學問の力がある。中學から大學と順序よく勉強して得た力もある。小學校を出たばかりの學歷で、其後は獨學で得た力

もある。然し、文學、哲學、醫學、理化學、工學、どんな學術技藝でも、その根原は天地の力である。天地の力を學んで得たのである。

天地は力である。花の咲くのも實を結ぶのも、雨がふるのも雪が降るのも、みなすべて天地の力である。紡績事業、鑛山業貿易業、其他一切の實業もみなすべて天地の力に人為を加えたものである。法律經濟の學問、文學哲學醫學理化學等の學問も又然りである。

天地の力は、直ちに人のものと爲し得るのである。努力と、

勤勉とを以て、その獲得に従ふ者には公平に分配されるのである。少年も、青年も、老年も、男も、女も、外國人も、日本人も、誰彼の差別はないのである。唯働く者に與へられるのである。多く働くものは多く得、少く働くものは少く得、實業を志さずものは財力をとり、學術に志さず者は學力を得る。誰でも、遠慮なく天地の力を自分のものとなすべきである。これ即ち人間の天職である。働け、働け！ 一生懸命に働け。さうだ、天地は悉く力だ！

物を弄そぶには宜しく志を失はぬ範圍に於てすべし。

故の辯護士代議士櫻井一久氏は、借金もしたり、藝者遊びもしたり、酒も随分と飲んだが、然し其の爲めに自分の職業を疎かにしたことはなかつた。どんなに生體なく酔つてゐても裁判所に出る時はガバと起きて出かけて、法廷での辯論は理論統徹少しも亂れた様はなかつた。

故の伊藤博文公は漁色で有名である。けれども、本當は始終そばに女を置いたと云ふだけで、その女と騒いで暮したと云ふ譯ではなかつた。坐つてゐても種々何か用事をしてゐた。その

—(日本及日本人)—

間(あひだ)にちよい／＼女(をんな)に戯(たは)むれる。ちよつと我々(われら)が煙草(たばこ)一服(びやく)と云ふ場合(ばあひ)である。或(ある)一人(ひとり)の女(をんな)に溺(なほ)れて、それが爲(ため)に政務(せいむ)の滯(とど)まりを來(きた)したとか、女(をんな)の巧言令色(こうげんれいしよく)にきいて天下(てんか)國家(こくか)を誤(あや)まるとか、自分(じぶん)を忘れて仕舞(しま)ふと云ふことは無(な)かつた。して見(み)ると伊藤公(いとうこう)の漁色(りしよく)は世間(よけん)の所謂(いはずる)女狂(をんなくる)ひとも異(こと)なつてゐるし、昔(むかし)の御家騷動式(おいへさうどうしき)とも意味(み)がちがつてゐたやうである。

櫻井氏(さくらいし)にしる、伊藤公(いとうこう)にしる、物を弄(もて)あそんでもその志(こころざし)を失(うしな)はなかつたものである。

耽(たは)つてはいけない。溺(なほ)れてはいけない。圍碁(ゐご)に夢中(むちゆう)になると

親の死に目にも逢はぬと云ふが、それではいけないのである。遊ぶべき時と、努むべき時とが、割然と區別がついてゐなければならぬ。

玩物喪志と云ふ、弄物必ずしも悪くはない。詩歌俳句、琴三味線、自分の本業の外の趣味と云ふものは唯にもあつて欲しい。然し志を失うまでに一生懸命になつてはならぬ。本職を忘れる程はまり込んでならぬ。道樂がすぎてはならぬと云ふのである。趣味道樂は大に鼓吹すべしである。これを趣味道樂として味はつてる程度で……

▽功名心が無いのは向上心がないのだ。

——(實業之世界)——

功名心とはエラクならふと云ふのである。エラクなつて如何するか、餘計な心配ではないか。普通に飲食に困らずに暮して行ければいいではないか……と云ふが、然し人間誰でもエラクなりたい。車夫でも、馬丁でも、電車の運轉手でも、職工でも商店の丁稚小僧でも誰でも今よりはエラク成りたいと思つて居る。教員、官吏、會社員、誰でも現状よりはエラクなりたいと思ふ。それが即ち功名心である。

世の中は絶えず進歩してゐる。絶えず發展してゐる。絶えず活動してゐる。此の世の中に處してエラクならうと思はぬならば、それは老人か、病人か、もしくは頗る意氣地のない者である。世の中は、是等のエラク成らうと心懸ける者に依つて進歩を促し發達を助ける。

誰でもいい、エラクならうと云ふのは結構なことである。望ましいことである。喜ばしいことである。エラクなつて貰はなければ困る。どうでもいい、エラクならなくもいいと、スマシてゐられては困る。それでは社會の進歩が止る。社會の發達が

絶える。誰にでもエラクなつて戴きたいのである。

だから功名心のないのは困る。エラクなつても詰らないではないかと、すつかり悟つた仙人のやうな氣持では困る。この列國競争の烈しい時代に、仙人ぶつて悟つてゐたのでは國家の益には立たない。相應に年を取り、働きの鈍つた者は、老人の冷水で、退いて餘生を送つた方がいいけれども、働き盛りの若い者はエラクならうと云ふ功名心がなくては困る。エラクならうとすれば、自然、事々物々の進歩がある。向上がある。どうか我々いつでも功名心に驅られて、そうして少しでも世の中の向

上と、延いては自分の身の進歩に努めたい。

鬼は己れの心で作る。

——(實業之世界)——

渡る世間に鬼はないといふ古諺もあれば、人を見たら泥棒と思へと言ふ言葉もある。何れが社會の真相であらうかと云へばどちらも偽ではない。何れでも一面の眞理はある。が、然しながら、人は誰でも自分自からを悪人だとは思つてゐない如く、他人も又決して悪人ではない。世間は鬼はないと見る方がよい。世間の人は泥棒だ。悪人だと決めてかゝつて交際するのは損

である。疑心暗鬼を生ずと云ふ。心に疑を以て見れば、ドンナものでも、如何なることでも、悪人らしく、鬼らしく見えるものである。自然、従つて世間でも自分に對してよく思ほふ筈がない。茲に於てか、自から鬼を作り、悪人をこしらへるやうなものだ。

それと反對に、人は決して鬼ではない。人はすべて善人であると云ふつもりでゐたら果して如何か、どんな悪人でも、どんなに敵意を抱いてゐても、此方から善意を以て交際つて行つたなら、長い月日の間には、いつか敵意もうすらぎ、悪意も失せ



て、本當の善人とならぬことはない。これは、基督教や佛教徒なぞの信仰談にもよく聞く話で、つまり申せば悪人を善人化し鬼を人間化したものである。

こんなことから考へると、鬼は己れの心で作ると云ふのは眞實である。己れの心が鬼だから人も鬼に見えるのである。己れの心が悪いから人も悪人に見えるのである。要は己れの心持ちにある。

男子門を出づれば七人の敵ありだとか、人を見れば泥棒と思へとか、さう云ふ考へで何事にも疑心暗鬼を抱いて、ビクビク

世渡りするのは損である。いつでも、誰でも、善人だとおもつて愉快に、安心して生活する方がどれだけいいか知れぬ。

大人物とは身を以て同胞國民に委ねるにある。

—(世の中)—

大人物とは何であるか、千萬の財産を作つたものであらうか大臣大將となつたものであらうか、大事業をなしとげた者であらうか、俄かに斷定するのはむづかしいが、記者は先生に同じて、身を以て同胞國民に委ねた者であると云ひたい。

大人物の事に志すや、一身一家の榮辱を顧みない。財産を

作るのも國家のためである。學を講ずるも國家のためである。政治家となり、官吏となり、直接國務の局にあたる者は勿論いふ迄もない。唯、それが、己れの利慾のためであるか。國家のためであるか。己れが名譽のためであるか。國民のためであるか。茲に人物の大と小とを計る標準があるのである。ドンなに大事業を爲した人であつても、大臣大將となつた人でも、巨萬の富を造つた人でも、前述のやうに、その志す所が、天下國家に懸つてゐないならば、其の人は決して大人物を以て稱する譯には行かぬ。

早い話が、足利尊氏は征夷大將軍となつて天下に號令したけれども、大人物としての國家國民の崇拜は、その敵手にして戦敗者たる楠正成公に及ばぬ。寺内は内閣總理大臣で、元帥大將である。然しながら、誰か彼を大人物とする者ぞ。城山に敗北した大西郷、明治天皇奉葬の日に自刃した乃木大將が、大人物として千萬世に傳えられるのは何の爲であるか。今更の説明を要せず、分り切つた話である。車夫、馬丁は申すに及ばず、記者、小商人、教師、どんな商賣をしてゐても、その志ざす所が天下の爲と云ふ自覺のある者

は、大人物として許し得られると思ふ。  
決断は私利を去るより生ず。

——(日本及日本人)——

何をするにも決断と云ふことは大切な事である。物を爲すに當つて決断のない者は決して大事を遂行し得ない。  
然し、決断と盲断を誤つてはならぬ。盲滅法に進んだのでは何にもならぬ。然し、多くは決断出来ないで迷ふやうである。なるたけ損をしないように考へる。くよくくと考へてる内に機會が去る。日が経つ。ついに折角の事業がうまく運ばないやう

な羽目になると云ふのは間々耳にする。  
ある目的を達するため、ある一事業を遂行するため、それにはある者を損をする覺悟がなくてはならぬ。ある一事業の方は捨てても、他の大事業の方で利得を見る。さう云ふ考へが必要である。一方永遠の利益のためには、目前少々の損害を敢て苦痛としない。

たとへば酒を飲んで悪いと云ふのは、誰に言はれなくつても分り切つた話である。而も目前一時の快樂のために中々禁酒が出来ぬ。女に溺れたり、賭博に耽つたりするのも、又同じや

うな理窟である。そして遂には一身一家をも誤り、國家國民を  
も賊なふやうな結果になるものだ。

だから、誰でも、目前少々の損害はあつても、永遠無限の利  
益をとるようにながけたいものである。

一身上のことに就てもさうであるが、國家國民の利害に關す  
ると云ふやうな場合には、私利を捨てなければ、その國家の利  
益になると云ふ大事業の遂行はむづかしいものである。賄賂と  
云ふ私利のために國政の運用を誤まつたり、女謁内奏のために  
國家の法律を曲げたりすることは、昔の英雄と呼ばれる人にも

少くなかつたは事實である。決断は私利を去るにありといふの  
は全たくである。

長所短所を考へるよりも先づ努力せよ。

—(世の中)—

誰にも長所短所と云ふことがある。どうせ人間世の中に處し  
て、この烈しい生存競争場裡の勝者とならうとするには、出  
來るだけはその長所に向つて歩を進めるのが、安全第一の方法  
である。

然し、どれが長所で、どれが短所であらうか、中々に分りに

くい。自分一身のことであつても分らない。自分では長所であると思つても案外長所でないかもしれない。何のつまりぬことだと思つてやつてることが、或は自分の長所であるかもしれない。自分の長所は何であらう、その長所に向つて生活の歩を進めやう。さうおもつて醫學にも志さす、文學にも志さす、化學、數學、語學、何でもかでもやつて見るが、思はしくない。一生録々として絶えるのは馬鹿々々しい話である。

自分には商人が適してゐるだらうか、それとも教師だらうか、社員だらうか、官吏だらうか、とやかく案じわづらつてゐて

は何にもならぬ。日は人を俟たずに過ぎ去つて終ふ。年をとつてからでは如何なる長所を悟りえた所で、爲し得る所は知れたものである。

要するに、思ひ立つたことをやり遂やうと決心して勉強するのが一番である。思ひ立つたことが、長所なこともあれば短所なこともあるかもしれない。しかしそれを考へてゐてグズグズしてゐては際限がない。長く考へてゐた所で分るものではない。とにかくやる。努力してやる。或は進歩の遅いことがあるかも知れぬが、そして又損をすることもあつてあらうが、結局は長

所を發揮しえられる。長くやつてゐた事が即ち長所になる。

長所短所は一寸のことで分らぬ。思ひ立つたことは努力すべしである。努力しないで分るやうな長所は決して長所ではない。短所を以て努力するのも決して悪くはない。

適材適所は必ずしも世の爲ならず。

——(世の中)——

適材を適所にをくと云ふことがある。左様しなければならぬ者のやうに考へられてゐるけれども、適材が適所にゐるのが必ずしも世のためではない。

適材が適所にゐれば、成る程仕事は都合よく運ぶ。會社でも銀行でも、その他の事業にしても、官省にしても、何の面倒も何の澁滞もなく事務が進捗して行くであらう。けれどもそれでは面白くない。餘り物事のキチンキチンと決つてしまふのは趣きがない。

適材が適所にゐないから、世の中には不平も起るのである。そして進歩があり發達があるのである。初めから適材が適所におさまつてゐたら、世の中は無味乾燥、進歩も向上もない。唯ありの儘の儘の原始時代を見るやうであらう。多少不適當なものが

あつてこそ、新陳代謝も行はれるのである。肉ばかりでなく、菜や澤庵が入るので胃の働きが健全になる。

百姓の子が百姓で終り、官吏の子が官吏で終り、坊主は坊主、醫者は醫者、教師は教師で終るものならば、世の中は何とつまらないものであらうか。土方の子が發奮して大臣大將にならうとするので、世の中に波瀾が生じ趣味が出来る。商人の子が學問に志さすので世間が面白くなる。ならぬものを成らせやうと努力する故に於て、社會は進歩して来る。人間は向上して来るそれが人生の真相である。

適材を適所にをくと云ふのは古いことばである。適材は適所にのなくもよい。適材が適所にないからこそ、世間に失敗だの何だのと云ふことがあつて、新陳代謝が行はれて、自然淘汰が行はれて、世の中が一步一步向上の域に進んで来るのだ。

だから、適材適所、必ずしも世の爲にならぬと云つたのは、此の謂である。

使をして要領を得ずに歸る者は望みがない。

——(世の中)——

支那の聖人は、四方に使用して君命を辱しめざることを、人間

一二三ノ頁

の價値を定めたる大事な標準としてゐる。

子供の使ひのやうだと云ふのは、使に行つても要領を得ないで歸るのを譏つた言葉である。使に行つて唯かへつて来ては仕方がない。子供でも、女でもなくつてそんな調子では全たく仕方がない。

だから用事は要領を得なくつてはならぬ。不得要領と云ふこともあつて、それが必要な場合もある。たとへば借金取に來られた時とか、何か不始末をした時など、ちよつと、その不得要領をよいとする時もあるが、然しながらすべての場合に於て要

領を得るのは悪いことではない。

用事は必ず是を果さなくつてはならぬ。不得要領で終らせてはならぬ。如何なる場合でも爲すべき仕事はきつとなし遂げる目的は必ず達すと云ふ者は實に重寶である。唯に商店會社、もしくは個人に使用される者ばかりではない。自分自身の事業の上に於ても、必ず爲し遂げると云ふことは望ましいことである。

今日の外交は要領を得ないのを以てよろしいとしてゐる。對外關係に於ては、國家としても、個人としても、要領を得さ



せぬやうにするのを利益としてゐる場合が多い。然し、それはちがふ。まづ多くの場合、要領を得ぬ者は望みがない。對外關係に於て、要領を得させぬのは、即ち要領を得たのだとも考へられるではないか。

支那の先王の時代から、日本の今日の時代に於てまでも、四方に使用して君命を辱しめず、即ち、要領を得てかへると云ふのは大切なことである。人を使ふに當つて、もし要領を得ずにかへるならば、其の人の前途はまつたく見込みのない者といはねばならぬ。

人の犠牲になるを歴はぬ所に人氣がある。

—(世の中)—

あの人は人氣があると云ふ。あいつは人氣がないと云ふ。人氣と云ふのは徳望であらうけれども、それがどうしてある人にはあつて、ある人には無いのであらう。

乃木大將は、旅順攻圍軍の總司令官として、幾多の苦い失敗をした。そして澤山の兵士を殺した。けれども人に怨まれないばかりでなく、日本第一の人氣を集めてゐる。位動から云つたら、山縣公よりも桂公よりも、更に寺内よりも下にゐる。然し

山縣桂寺内以上の人氣を得て、死しても尙社會の崇拜を得てゐるのは何であらうか。

山縣も桂も、寺内も、エライには異ないが人氣がない。人氣の集まると云ふのはドウ云ふ具合であらうか。悪いことをしなればかりではいけない。人格がいゝだけでもない。自から守ること薄く、事あれば生命財産を抛うつと云ふ所に人氣の集散があるのではないか。悪いことはしなくつても、己れの安全ばかり計つてゐる者には人氣がない。

安田や大倉も實業界では、相當の財産もあつて先づ十指を屈

する一人であらうけれど、濫澤男程の人氣はない。その財産を作つたのは己れのため、社會國家のためではなかつたからである。學者でも、學力は當代斯界に冠たる者があつても、その人氣は學士位にだもしいかない者がある。大町桂月や、大隈候爵などは大した學者とはいへぬけれども、他のエライ學者先生よりも人氣がある。

政治家でも、軍人でも、實業家でも、學者でも、人氣の集まる人と云ふのは、多くは、己れ一人よりも更に多くの人、廣い社會のためになるといふ所に於て一致點がある。人の犠牲にな

るのを厭はぬ所に人氣がある。己れの利害にのみ汲々たる者は  
餘り人氣はない。ないのが當然である。

機會は絶えず到來しては過ぎ去る。

——(世の中)——

機會と云ふことがある。機會は大切なものである。機會さへ  
あれば、黃龍豈地中のものならんやと支那人は云つてゐる。項羽  
は、時利おらず雕逝かす』といつて、その拔山蓋世の氣力も何  
の爲すなきを恨んだ。大小の差別はあるけれども、機會を得た  
者はトン／＼拍子に成功し、機會を得ぬものはいつも失敗に苦

しんでゐる。

然らば機會とは何であるか。棚から落ちるポタ餅である。中  
々落ちて来る者ではない。之を拾つたものは機會を得たと云ふ  
のである。又は天祐ともいふ。天祐を得た者は機會を得たと云  
ふ。天祐と云ふことは待つてゐたとて来るものではない。棚に  
ポタ餅があつたとした所で、手を延ばさなければ捉れるもので  
はない。天祐はいつでもあると思つた時にある。ポタ餅はいつ  
でも棚の上をいてある。要するに、取らうとする者の心がけ  
一つである。

ガリレオはピザの塔で釣ランプの動くのを見て、ある法則を  
発見した。釣ランプの動くのを見たのは一つの機会を捉へたの  
であるけれども、然し、釣ランプの動くのは誰でも見てゐる。  
ニュートンは林檎の落ちるのを見て引力の理を発見した。然し  
林檎の落ちるのを見たのはニュートンばかりではない。そして  
又別段に珍らしい事實でも何でもない。  
思ふに、機会は何時でも絶えず目の前に到来しては行き過ぎ  
る。釣ランプは今も昔も動いてゐる。林檎は今も昔も熟しさへす  
れば落ちる。然し、それをつかまえたのはガリレオ一人である

ニュートン一人である。機会は、到来した時に捉へなければ、  
如何にしてもつかむことは出来ぬ。到来して過ぎ去り、過ぎ去  
る機会はいくらもある。ナザレのイエスは野の百合に人生の  
真相を悟つたではないか。

物はツブシ價の利くに限る。

—(實業之世界)—

官吏をしてゐた時は大分敏腕の評があつたが、實業界へ入つ  
たら案外無能だと云ふ人はある。野にゐる時はすい分大抱負、  
大理想を唱道してゐた政治家も、一朝、局に當ると案外仕事か

出來ない。理想も抱負もなく過ぎる者は澤山ある。

金の茶釜は、茶釜としてでなくつても價值がある。金其ものに價值があるからである。官吏が住んでゐても、實業家が住んでゐても、家屋そのもの、價に變りはない。人間もさうでなくてはならぬ。甲の場所では敏腕を振つたが、乙の場合には無能だつたり、ある有力家に引立てられてゐた頃はよく働いたが、その有力者から離れてからは少しも働けぬと云ふやうでは駄目だ。甲に適しても乙にも不適當だと云ふやうな偏した力では何にもならぬ。人を離れて仕ごとの出來ぬやうな才能では駄目だ。

つまり自分自身の價值がないからである。自分に實力がないからである。偽物の金だつたのである。つぎはぎだらけの見かけばかり立派な家だつたのである。ツブシが利かないのは仕方がない。

女が一生の苦樂他に依ると思はれる間、女の位置は高まらぬ。男が、事業の成敗、たゞ運不運、機會、有力者の後援、さう云ふものに依頼してゐる内、その人の本當の實力は養はれない。一切の運命を無視するのではないけれども、少くとも、如何なる場合にも實力を養成して、そして如何なる場合に處しても志

さす所を爲し得るやうでありたい。  
 實力のある者は價値がある。價値があるからツブシが利く。  
 何でも物はツブシが利かなくては駄目だ。運が悪いのか、機會  
 が来ないのか、人間の成功はむしろ實力にありはすまいか。古  
 往今來、英雄豪傑の成敗のあとを考へて見ると、實力か、運か  
 差別するに難くはないと思ふ。

出来ぬと思へば出来ず、出来ると思へば出来る。

——(實業之世界)——

ナポレオンが自分の辭書に不可能と云ふ字はないといったの

は有名な話である。

月の世界に飛んで行くとか、一足飛びに内閣の大臣になると  
 か、巨萬の富を手にとぎるとか、さう云ふ夢のやうな空想的な  
 ことは出来ないけれども、まづ自分でやらうと思ふ程のことは  
 必ず出来る。

世間に於ける通常一般の事業は、出来るか出来ないか、さう  
 明白に判断のつかぬものが多いのである。然し出来るか出来ぬ  
 か區別のつかぬ時に當つて、少くとも出来ると思ふのは、事  
 業進行上の大した力となるものである。よし出来なくつても、

出来るとおもつて費やした努力と経験とは、常人にとつては實に尊とい教訓となるではないか。

もし、これと反對に、初めから出来ないと決めてしまつたら出来るものでも決して出来ることはない。見え切つた話である。そしてあの時斯うしてをけば今日の失敗はなかつたらうとか：  
…云ふような後悔をする時がないとも限らぬ。

空想的な、あまり現實とかけ離れたことでない限り、大がいの事業をきつと出来るものと信じてやるのはいゝことである。出来ない出来ないで、唯いたづらに考へるばかり、引込み思案

をしてゐたのでは到底何事をも爲し得るものではない。出来る出来る、きつと出来る。ドンな困難でも、どんな障害でも、きつと凌ぎおほせて成功して見せる。男は左様云ふ元氣で事業にとりかゝりたい。たとへ、その時は一時不成功のやうに見える事があつても、その事業遂行上に得た多くの智識は、他日何らかの場合に必ず應用が出来るのである。

出来ないとしても前述のやうな利益があるのに、況んや、出来ると信じて出来上つたらば、その愉快は何ものにも變えられない楽しみがあるではないか。

## 奮發次第、努力次第。

—(世の中)—

人各々、境遇が異つてゐる。馬車に乗る人もある。自働車に乗る者もある。あるひは草鞋がけで歩くものもある。使ふ人がある。使はれる人がある。貴賤貧富、千差萬別である。今日有福であつても明日また有福であるとは思へぬ。今日貧乏だから何時まで貧乏ぐらしを續けて行くと限つてもゐない。昨日の富豪は今日の零落者である。今日の貧乏人は明日の大福長者である。そこが面白いのである。人は何が幸福になるか、

何が不幸になるか、決して分つてはゐない。一時不幸であつても幸福になれる。一時幸福であつても不幸にならぬ譯ではない。運不運と云ふけれども記者はこれを奮發次第、努力次第と申したい。

大厦高樓から必ずしも大人物は出ない。破屋から、貧乏人が出ると決つてはゐない。大厦高樓に何不足のない家に住んでゐても、奮發がなく努力がなく、たゞあるが儘でうき／＼暮してゐたらば、坐して食へば山も空しく、遂には素寒貧になる。その日／＼の食物さへも自由でない家に生れても、奮發次第、努



力次第で、財産家にも、學者にも、高位高官にも上られる。誰でもさうなる。そこが世の中の面白い所である。

運不運は、奮發次第努力次第である。誰彼の差別なく、よくもなり悪くもなる。決つてるようで決つてはゐない。人生五十と云ふけれども、それさへ決つてはゐない。大隈侯は百二十五歳と云ふ、その百二十五歳説の候でも近頃はメツキ弱い。そこが面白い。

運がよくても得意になつてはいけない。益々奮發努力してその運をはなしては行かぬ。運が悪くつても悲觀してはならぬ。

その悪い運をよい方へ向け直すべく一生懸命奮發すべきである努力すべきである。

物は分り切つては面白くない。

—(世の中)—

世の中の事々物々、その本末が分り切つてゐては面白くない。人生五十年と決つてゐたら、人間は何にもする氣にならないで、唯五十になつて死ぬのを俟つてるかも知れぬ。人が生れた時から死ぬまでの運命が、ちゃんと分つてゐて、決つてゐるならば、勉強もない、努力もない、進歩、向上、ちつともない。

世の中は本當に面白くない。

何時死ぬか分らぬから、衛生にも氣をつけるし、醫學も發達する。努力次第で財産家にも學者にも政治家にも成れると思ふからこそ、勉強してエラクならうとする。従つて實業が發達し學問が進み、社會が改良されて行く。どうなるか分らないと云ふ所に、物の價値がある。従つて物の進歩が企てられ向上發達が計畫される。國家としても、個人としても、この理屈からは外れない。

人生不可解だなんぞいつて死ぬのは馬鹿々々しい。もとく

解らぬのが人生の真相なのだ。分らせやうとあせるのは愚だ。分つて終えば味もそつけない。あけてくやしき浦島の玉手箱中には煙より外には何にもあるまいけれども、煙と知らずに珍重してゐれば、寶物として通る。わかつてしまへば僅かに一道の煙でしかなかつた。馬鹿々々しい、世の中はみんなさうしたものだ。

世の中は分らぬ所に面白味がある。此の本にこう云ふことがあると分つてゐたら買つて見る必要はない。新聞の續きもの、小説が面白いのは、分らない明日の場面の變化が好奇心をそゝ

るからである。分つたやうで分らぬ所があるので世の中が成り立つてゐる。泣くもよし、笑ふも咎めず、怒るのも悪くはない。分らぬのを分らせやうとあせる所に人生の面白味がある。人生よ、永久に人と云ふ淺薄な動物にその奥を見せてはならない。

人間を計るは其の働きにあり。

—(世の中)—

あの人はエライと云ひ、エラクないと云ふのは何所を以て決めたらいゝか。成功失敗は富貴の尺度で計る。何れだけか富み貴とくあれば成功である。然らざれば失敗である。然し、位は

人臣を極め、千億の金を抱いてゐても、世間からは有るか無きかに見られてゐるのは何故か、官、必ずしも貴くないからである。金、必ずしもエラクないからである。

秀吉がえらいのは關白といふ位ではなくて、關白にまで成りえたその働きである。岩崎彌太郎はその財力からいつたら世界第一ではない。然し無一文からあれだけの財産を作つたのがエライのである。ワシントンがエライのはその人間としての働きがもつともよく現はれてる所にある。ナポレオンは離れ島で窮死したのは失敗らしいが、彼のエライのはその自分の腕の働き

を發揮したからである。西郷隆盛は僅かに陸軍大將で、然も最  
後には位を奪はれ城山で敗死した。然し今尙英雄といはれるの  
は其の働きが自由に伸びてゐるからなのである。

自分の信する所に向つて、自分の腕の力を思ふさま働かすの  
が本當のエライ人である。世に名が現はれなくつても、その人  
は英雄として尊敬すべきである。

教師は教師としての自覺に立つて、生徒の訓育に力を盡すの  
がエライのである。商人は商人としてその商業に忠實なのがエ  
ライのである。職工徒弟、官吏、農夫、各、その職業とする所

に努力して、幾分づゝでも國家と國民とのために働くのが、本  
當の意味で云ふエライ人である。だから人は誰でもその努むる  
職業のために出来るだけ働かなければならぬ。腕の力の限りを  
發揮しなければならぬ。其所に本當の人間の價値が現はれるの  
である。私利私慾に耽つてる大臣や實業家に何のエライ所があ  
るものだ。

爲さねばならぬ事を爲せ。

—(實業之世界)—

人の面相の異ふが如く人の思想も能力もちがつてゐる。どん

な人でもきつと他人の及ばぬ所がある。愚人でも、その愚や及ぶ可からずとさへ云つてる。

長所を發揮すればいゝ。唯長所の何であるかは分りにくい。然し己れの見て長所とも、人も又さう認めることに努めればいゝ。先づ、爲さうと思ふことをする。人の運命に浮き沈みがあるのは、爲さねばならぬことをするとせぬとにある。爲さねばならぬことは誰でも爲さうでゐて中々出来ない。是非とも爲さねばならぬことを斷乎としてやる。

信長が光秀に討たれたとき、誰でも爲さねばならぬことは光

秀を討つことであつた。然し誰れもよくなし得なかつた。一人衆に先んじて爲した秀吉が勝つた。利害よりも、得失よりも爲さねばならぬことは是非ともしなければならぬ。秀吉はそれを知つてゐた。

柴田勝家でも、瀧川一益でも、信孝でも信雄でも、爲さねばならぬことを知つてゐたけれども、利害得失を考へてゐて中々に手が出なかつた。爲さうとした時はすでに秀吉が爲した後であつた。そのためにとうとう秀吉に天下をとられ、彼等は自然死滅せなければならぬ運命に落ち入つたのである。

如何なる場合でも、事に大小はあるけれども、斷乎として爲すに如くはない。失敗もある。危険もある。然し、何事をも爲さずして平凡に終るよりはよろしい。萬全にして利益を得ると云ふことは少くない。如何なる場合でも得失は必ず相伴ふ。身を捨て、こそ浮む瀬もあれと云ふのは事實である。浮ばぬこともあるかもしれぬが、それも止をえないことだ。

秀吉は、勝つても負けても、どうしても光秀を討たねばならなかつたのだ。さう云ふことは屢々ある。利害を打算しないで、唯すみやかに爲さねばならぬことをせよ。

人の運命は性分に左右さる。

——(實業之世界)——

人は生れつき、内氣なものあれば、勝氣な性分のももある。内氣はともすると引き込み思案になり、勝氣は向ふ不見になりやすい。徐々に地歩をしめるもの、一氣可成的に地位を得るもの、處女の如きもの、脱兎の如きもの、種々様々であるが、性と云ふものは争へない。

善くなるか、悪くなるかは、その境遇に依りその周囲の感化等にもよるが、根本の性分を直すことは出来ない。三子の魂百

までと云ふのは其の事である。

どうも仕事はやりたいが家の事情がゆるさない。周囲の境遇がどうも自由に働かせえない……といつて嘆息する者もある。境遇にも制せられず、ドシ／＼所志を遂行してゐる者もある。怠けるものもあり、働かねばならぬと云ふものもある。捨鉢になるものもある。あくまで失敗と戦ひ、困難を凌いで行く者もある。然し、何れにしても性分の支配は免かれない。

この性分と云ふ奴は、眞實人の力ではどうすることも出来ない。持て生れたのである。授かつたのである。だが然し、人の

運命は性分に左右されてよくも悪くもなるのであるから、内氣にしる勝氣にしる、いと信ずる所を修養練磨して助長させる工夫が肝要なことではあるまいか。

内氣には内氣の徳がある。勝氣には勝氣の利がある。一長一短、何れがよろしいとは斷言し得ないけれども、ともかくにも修養を加え、鍛練して行くと云ふ心がけがなくてはならぬ。さうして幾分か性分を善化して行けば必ず得る所がある。

有爲の書を読み有爲のことに當れ。

——(日本及日本人)——

詰らぬ本を讀んではならぬ。書物は智識の寶庫である。然し下らない書物に讀み耽つてはならぬ。讀めば必ず世を益し人を益するやうな書物でなくてはならぬ。

奮闘だ、努力だ、活動だ……よく聞く語であるが、然し、唯徒らに奮闘した所で、それが社會に没交渉であり、自分一身の利益を主とするものであるならば、奮闘も努力も活動もなきに如かぬものである。如何云ふ事業が社會のため人のためになるか。それは書物に依つて、見聞に依つて、自然と養ひえたる智識で解釋する。

人は、廣く世界各國人の活動ぶりを見て、そして自己の奮闘の助けとなすべきである。そして他に劣らず、更に一層有益に遍切に働く可きである。さう云ふ活動力を、有爲なる書物に依つて修養し、鍛練しなければならぬ。そして有爲のことに當るべきである。

人は多い。書物は多い。事業は多い。然し、有爲の士は、有爲の書物を讀んで、有爲の事に當らねばならぬ。是れ即ち最後の勝利を得る所以である。

然し、書物に捉はれてはならぬ。孟子も悉とく書を信せば書



なきに如かずといつた。眼光紙背に徹する底の読み方でなければならぬ。信すべきか信すべからざるか、是非善悪をしつかりと判断して讀まねば、書を読んでも決して益にはたゝぬ。須からく自分の事業に適應した書を読んで、業務に對する智識見聞を廣めるやうにせねばいけない。そしてそれは直ちに自分の事業の上に實行して行かねばならない。

絶えず、倦まず、努めるのである。いゝ加減のことで世を送つてはならぬ。いやしくも男子と生れたならば、一言一行、ことごとくこれ世のためである。人のためである。その自覺を以て

奮闘し、活動し、努力すべきである。これやがて自己のためである。

繰り返して言ふ。有爲の士を以て自ら任ずる者は、有爲の書を読み、有爲の事に當るべきである。

決断すれば猪突猛進する。

——(日本及日本人)——

機會は中々來るものではない。一度機會が來たならば全力をあげて猛進すべきである。ある機會を見付けて、猪突猛進して行く所に事業の成否がある。

徒らに危ふきを犯すのは云ふに足らぬ。然し突進すべきときに突進しないで、あつてもない。斯うでもないとき考へてゐては時が移つて大事が去る。

信長は至つて注意周到、用心深く中々危ふきには近よらなかつた。然し、今川義元が大軍を以て攻め來つた時、左右みなその勢を避けて退くことを勧めた時に、一人聞かす遂に敵に向つて突進し大勝を得て勢を一變した。

ネルソンは常に、敵と對して戦ふべきか、戦ふべきでないかわからぬ時はいつも戦ふべきに決心したといつてゐる。進んで

いゝか、悪いか分らぬ時は一意、突進するがよい。考へるのはよい。深く考ふべきである。出来るだけ考ふべきである。然し考へずにしては何にもならぬ。ある邊で思ひ切らねばならぬ。そして斷々乎として行ふにある。戦争ばかりでなく、何事業を企てるに當つても必ず左様あるべき筈である。

思ひ切りが悪く、やりかけても尙躊躇逡巡してゐては何事もなしえぬ者だ。やりかけたら猪突である。猛進である。わき目もふらずに努めるのである。爲すべきことは斷乎として爲すべきである。何でも得のある所にはいく分の失がある。差引き

して得の多いのを得策とする。猛進猪突には損失も伴ふ。亢龍悔ありともいふが、然し、世の中には猪突猛進しうる者は少ない。猪突猛進は相場のやうに一か八か投げ出すのではない。思ひ切つて仕事を初めた以上、あくまでも全力を注いで行ふことである。向ふ不見とは異ふのである。

多くの場合拙速を尙ぶ。

—(日本及日本人)—

熟慮斷行と云ふことがある。結構なことである。然し、多くの凡人は熟慮がすぎて大事の場合をとり逃して終ふ者だ。

無鐵砲、盲めつ法、いづれも悪いことだ。後悔先に立たずともいふが、然しあまり考へ過したら何にも出来ない。よく人が、篤と考へてしやうとか、熟考の上とかいふが、然しさう云ふ人が果して篤と考へるか、熟考するか、それは分らない。大抵は深く考へもしないで、唯速答するのを避けるだけのやうだ。つまり速やかに判断するのを欲しないのである。慎重の態度をとると云ふけれども、結局はたいぶらくに日を送つて、初めに考へえた程の低度のことしか考へられないものである。いくら考へた所でない袖は振れない道理である。よし又

よい考が出た所でもう大事は過ぎ去つて終ふやうなことがない  
でも無い。

考へ込まないで速断して、決行して、そしてその結果は最も  
よく考へたものと同じになるものだ。直覺的に判断しうるので  
ある。けれども左様ばかりも言へない者もある。考へる。考へ  
てやる。然し結果は同じことである。要するに人各自の天分に  
も依ることであるけれども、考へ込むと云ふ方は時機を逸しや  
すい。拙速必ずしも拙速でない。

人間普通の能力のある者ならば、大事に望んで、是非の判断

の付かぬ者はない。電光石火、進むべきか退くべきか、爲すべ  
きか爲すべからざるか。早速に判断の出来ぬ者はない。判断を  
のばすのは悪い習慣から來てゐることが多いやうだ。そうして  
ゐる内に知らず／＼考へ込んで、迷つて、煩悶して、ついに何  
事も爲しえないやうな結果を來すものだ。誤ちがあつてはなら  
ぬと考へてゐると、つい過誤も生じて來るものである。我々は  
どうか事に當つて速断する習慣を付けたいものである。

人は部分に於て死し大體に於て生きる。

鬚を削るのはそこが部分的に死ぬのである。然し人と云ふ全體から見れば綺麗になつたと云ふことに於て、新らしく生きたのである。

人は一代名は未代だと云ふ。昔から今日まで國家のために身を犠牲にした英雄は、身體と云ふ部分の生命を捨て、名に於て後世永遠に生きたのである。生命を現世に捨て、後世未代の名を求めて生きたのである。

安樂に一生を過した者がある。幾萬と云ふ財産を積んだ。大臣にも大將にもなつた。然しそれが自身一個の都合のいゝやう

に暮して来た者は、今日、果してどれだけ人の記憶に残つてゐるだらうか。部分に生きて、全體に死んだのである。廣瀬中佐にもし自分の安樂を希つて、杉野兵曹長を捨て、顧みなかつたならば、今日國民からドレダケの崇拜を受けたであらうか。一身の危急を顧みず、部下の生死を案じたと云ふあの崇高な至情至誠が、今日、軍神の名を得たる所以である。身體と云ふ部分は死んでも、名と云ふ全體は永遠に生きて、後生尙萬夫を起したしめるのである。

部分に於て死し、大體に於て生きると云ふのは、損をして得

をとれと云ふのである。小さい損をして、大きい得をとると云ふのではあるまいか。然も多くの凡人は目前の小さい利益のため、永遠の大きい利益をすてやうとしてゐる。事を爲すに當つては、何れが是れ小利大益であるかを、よくよく考察して努めねばならない。

然しながら、損をして得をとれと云ふ考へでやるのではない。要するに私心をして、公共的に生きると云ふのである。自分一個の幸不幸を考へてゐるのは小さい。天下國家の幸不幸を憂ふるに於て、初めて光榮あり、意義ある生活をなし得る。

毀譽褒貶は性格を鍛練する。

—(想) 義—

よく言はれやうが、悪く言はれやうが構つたことではない。と濟してゐる人もある。然し又、人の評判を一々氣にしてゐる者もある。餘り氣にするのも不可、左様かといつて氣にしないのも善くはない。

評判が悪いから、是をよくするやうに努力するのがいいか、それとも又評判なんぞ何うでもいゝと言つて棄て、置くのがいいか、人によつて考へは異ふ。然し實際、人の評判ほど當にな

らぬものはない。それを一々氣づかつてゐては仕方がない。然し又、その評判と云ふのが中々に當つてゐないとも限らぬ。當つてゐたからつて何の、人の評判なぞと濟してゐても仕方がない。

賞められれば闕みが付く。折角やつてゐるのを貶されると面白くないから怠ける。子供でも左様である。大人でも左様いふ傾向がある。偽にもせよ、賞られるのは嬉しくなくはない。たとへ本當でも貶されるのは面白くはない。評判はどうでもよくはない。人の噂さも七十五日と濟してはゐられない時もある。

よい時もあり悪い時もある。要は、その評判の依つて來る所以を考へて、改むべきは改めなければならぬ。よい所は益々助長させて行かねばならぬ。

人は性質を異にし境遇を異にする。然し毀譽褒貶に動かされぬ程のものは恐らくはない。實際社會に立つて、善くも言はれ悪くもいはれるのは、その人の性格を鍛練するのに與つて力がある。善く言ふ者にはよく言はしめ、悪く言ふ者には悪く言はしめる。然し、己れは内に顧みて、善惡是非の批評の何所から發するかを考へなければならぬ。さうしてゐる内に、不言不語

の間に性格が鍛練される。自然に悟了徹底して来る。

善くも言はるべし悪くも言はるべし。

—(世の中)—

人は善くも言はれ、悪くも言はれるのがよろしい。善く言はれてばかりゐると、少し悪く言はれてもすぐに腹を立て、己れの愚を現はす。悪くばかり言はれてゐる者は、僻んでよいことをしなくなる。人の一生は波瀾重疊、一伏一起、七轉び八起きである。世間との關係が變ることに善くも言はれ悪くも言はれるのである。

生きてる内悪く言はれて、死して後善く言はれる者もある。西郷隆盛がさうである。英國のクロンウエルがさうである。星亨も今に尙惜しがられてゐる。子供の時に悪く言はれて成長して後善く言はれる者もある。初めに評判がよくて後に悪いのがある。勝てば官軍、負ければ賊である。十の神童二十の才子、二十五になりや唯の人と云ふこともある。大隈侯加藤子を悪く云ふのは政友會の連中である。寺内々閣の一派である。寺内々閣を難じ政友會に反對するのは憲政會の連中である。見る所を異にし、立場を異にするに従つて、善くも言はれ、悪くも言



はれる。

善く云ふのも本當である。悪く言はれるも實際である。誰が善く云ふか、何人か悪評をするか、そこを考へるのが肝要である。そして自から願みて己の善悪を辨別するがよろしい。内観内省して善を勧め悪を改めるがよろしい。善く言はれたからつて、必ずしもそれが本當ではない。悪く言はれると云つてもそれが果して實際ではない。善く言はれて高慢にならず、悪く言はれて怒らないのがいゝ。是非の判断は天地がよく知つてゐる。人は善く願ふは悪いとおもふことは一切爲さぬことである。人が善

いといつても、自から信じて悪いことは爲さないがいゝ。人が悪いと云つても自から良いと信じたことは斷然決行するがよい。但し、その辨別を誤まらぬやうにしたいものだ。

人々各々最も善しと認むる所を爲すべし。

——(實業之世界)——

とかく世の中は儘にならぬ者である。實力があつても用ひられぬ者が多い。力も何にもない後進の者でも、權門富學の知己であるために、世にも用ひられ、人にも秀でた地位にゐる者が多い。自分だけの實力があつて、それで一生不遇に終るのは情

けない——こんな考へを持つてゐる者は少くはない。  
左様云ふ考へを持つてゐるのは悪くはない。然し持つたゞけではな  
らぬ。一生不遇に終らぬやうに努力すればよい。世間は決して  
盲目ばかりはゐない。何時かは自分の努力が認められるものだ  
自分の實力が発揮せられるものだ。然し働いても、努力しても  
尙かつその社長なり主人なりが認めて呉れぬならば、もつと廣  
い所へ出て、自由に腕を振つて見るがよい。實力のある者は、  
方に依つて働ける。若し働けなかつたらば實力が足りないもの  
として更に一層奮發すべきではないか。

人は自分の最善を盡すがよい。きつと世間に認められる。  
時は世に現はれなくつても永い月日にきつと光が出る。もし又  
認められなかつたならば、力量の足らぬ所と思つて一層努むべ  
きである。實力ある者、努むる者、働く者は決して世間で捨て  
ては置かない。  
人々各々、最も善しと認むる所に力を致すべきである。力の  
あるだけは伸びる。伸びてさうして人にも認められ、世間にも  
用ひられるものである。

幸福續きの者は鈍刀の如し。

人間は何時でも幸福ばかり續いては居らない。不幸だからと云つて、失敗したからと云つて、棄鉢になるのは自から禍を求めらるやうなものである。不幸は教育である。失敗は経験である。新たに教育され、新たに経験したる所を以て更に大に爲す所あらんとし、而してよく成し遂げれば事業を成すの實力を生じて來るものである。

幾度も失敗し、その失敗に屈せずして起き上るのは、恰かも刀を鍛えるやうなものである。幾たびか鍛えに鍛え直して、秋

—(日本及日本人)—

水、鐵を斷つ力となるのである。よく失敗に堪える力のある者は、失敗しても挫折しても決して落膽したり、悲觀したりしない。新しい教育新しい経験をえて、更に一層力を振起して努力する。

幸福ばかり續いた者は、鍛えざる鈍刀の如くである。形は刀であつても實際の役にはたぬ。失敗すれば落膽して悲觀して再び起つ能はぬ。トン／＼拍子で若い内に成功した者は一度や損なふと、もうそれでまる潰れである。十成した者に大成功のないのはそこであると思ふ。

事業の成敗は力である。力の根原は意志である。意志は失敗や困難に逢うて鍛練したのでなければ、本當に充實した力を發揮することは出来ない。

力ある者は逆境を愉快に感ず。

——(實業之世界)——

逆境といひ、順境といひ、人の心得一つで直ちに地位を變換する。逆境で奮發すれば順境になることが出来る。順境だといつて安心してゐれば、又逆境に落ちないとも限らない。

順境必ずしも羨やむべきではない。奢る平氏は久しからず

である。逆境必ずしも悲觀すべきではない。逆境を苦しいと感ずるのは力のない者である。意志の弱い者である。力のある人は逆境に立つたのを、その力の振ひどころとして却つて愉快とすべきである。山中鹿之助が『憂きことの尙この上につもれかし限りある身の力ためさん』と歌つたのは此の逆境に於て愉快を感じてゐるのである。

順境だからと云つて、それで満足して修養を怠つたり努力を忘れる者は、決してその順境を續けて行くことは出来ない。出来たとしてもそれ以上の發展は覺束ない。順境むしろ呪ふ可き

ではないか。然し、順境にあつて怠らすつとめる者はエライ。  
 本當に力のある者はトン／＼拍子の順境では何となく物足り  
 ない。困難に困難を重ねてその間に悠々迫らざる所がある。自  
 分の力をためすのである。逆境を楽しむのである。逆境の恩寵  
 と云ふことが頻りに言はれたが、苦しい境遇にゐて尙天地の恩  
 寵を味はふのである。かくの如くんば逆境必ずしも逆境では  
 ない。自からの力を信する者は斯くあるべきである。さうして  
 大事大業を成し遂げるのである。  
 要するに逆境を苦としないものには逆境と云ふやうな者はな

い。順境だといつても、順境を守ることが知らず、順境をたの  
 しむことを知らぬ者には順境と云ふものはない。順逆、何れに  
 しろ、人間の見やう一つである。考へやう一つである。一切無  
 差別である。

心得の確な者には得意失意の別はない。

——(日本及日本人)——

心得のたしかな者には得意時代とか失意時代とか云ふ區別は  
 ない。如何なる場合にも得意にはならぬ。如何なる困難失敗に  
 逢つても失意にならぬ。他から見て得意失意と察すべき時があ

るかもしれないが、當人自から得意になつたり失意になつたりするのでは、餘り前途に望みはない。

喜怒哀樂と云ふことがある。嬉しい時には嬉しく、悲しい時には悲しむ。それは人として普通のことである。得意と失意とはちがふ。自分の思ひが叶つたから喜び、叶はぬから悲しむのはよい。然し、思ひが叶つたからといふて得意になるのはよくない。満足顔に誇るのはよくない。思つたことが通らぬと云つて、失望落膽してしまつて、殆んど仕事に手がつかぬと云ふのではない。さう云ふ人は餘り心得の確かな人とは言へない

前途有爲な人物として稱するには足らぬ。

思ふに一生は長い。ある時思ふやうになつて得意になつて終つては、その先々で遭遇する出来事をどうしやう。ある時、失敗したからとて、それで忽ち悲觀して失望してしまつては、この先多くの事件をどう處理して行くか、いやしくも將來のある者は、爲す有る者は決して得意になり失意になるべきでない。人は多く得意になつて失敗し、失意になつて元氣が喪失してより以上の發展はむづかしい。得意失意は將來に希望を有する者の慎しまねばならぬ所である。

一生の大志を抱くものは小成に得意になるな、一敗に失意になるな、喜ぶべき時には喜べ、悲しむべき時には悲しめ、然し人間の一生を通じて得意の時失意の時など云つてる閑暇はない。不斷の努力である。不斷の突進である。淺薄なものは得意になり、意氣地のない者は失意になる。確かりした意志を抱いてる者はいつでも同じ心持ちで仕事をする。

職業難は寧ろ社會の進歩を促す。

—(實業之世界)—

職業難は處世難である。生活難である。生活難の聲の絶えな

いのは、食へないと云ふのではなく、高い程度の生活がなし難いと云ふのではあるまいか。低い程度の生活をしてゐれば困難のあるべき筈がない。何れにしても生活難は食ふに困るのではなくつて、よく暮せないと云ふ問題である。

食へぬと云ふことはない。そんな意氣地のないことはない。少しでもよく生活して行きたいから、いろ／＼の困難がある。思ふやうに行かぬ。そこで處世難と云ふことになり、職業難と云ふことになるのである。然し、これは結構である。唯食ふてただけならば犬でも猫でもよくやつてゐる。人間たい食ふだけ

では犬猫と區別はない。それでは困る。或は物質的に美衣美食を得やうとする。或は精神的に智識思想を修養しやうとする。茲に於て社會が進歩し發達して來るのだ。

困つた者は何時の世にも何所にでもゐた。決して新しい言葉ではない。昔は人口が少ないかはりに土地もひらけなかつた。今は人口も多くなつたが土地も澤山開けて來た。段々にさうなつたので急に始まつたのではない。思ふに人智が拓けて、より以上の生活を望むから、土地が開けたけで足りず、機械が發明され、宗教が傳えられ、教育が普及し、自然従つて社會が進

歩して來たのである。實際、今の世の中は何所を見ても人が満ちてゐて中々よい職業が得難い。得難い職業を得るには何程か勉強しなければならぬ。或は又新たなる事業を企てなければならぬ。社會は個人々々の必要に應じて一步一步進歩の域に達する。

世の中は中々思ふようになる者ではない。樂に通れる者ではない。思ふやうにならぬから骨も折る。樂に通れぬから苦勞もする。それで進歩する。世の中のことが、人の思ふ通りになつたら進歩は止つてしまふに異ひないと思ふのである。



## 一身一家の爲にのみ盡す者は世間が狭い。

—(日本及日本人)—

自分の一身上のことばかり心配してゐる者はたえず一身一家のことを思ふてゐる。贅澤をしても世間が狭い。高位高官に昇つても面白くはあるまいと思ふ。儲けた金を損をしないやうにクヨクヨ考へたり、折角得た地位を離れまいとしたり、金があつても、位が高くて、自分のことばかり思つて暮すのだから甚だ世間が狭いばかりでなく、不安なく日を送ると云ふことは無い。だから一朝財産を失うとか、免官退職などになると、

身も世もあらぬやうに悲観する。面白くないことである。然し、人の爲にするとか、社會のために盡すとか、己れより外に目を配るものは、己れの身にふりかゝる利害を感ずることが餘り痛切でない。胸中に何となくゆつたりした所がある。落ちついた所がある。貧賤に處しても、陋巷にゐても、綽々として餘裕のある安らかな生活をしてゐられる。

日本でも、支那でも、歐米でも、古來、財産家、政治家は少くはなかつたらう。けれどもどれだけ人の記憶に残つてゐるか生きて死んだ、犬や猫と何の選ぶ所もなく終えた者が澤山にあ

る。然も、十字架上にハリツケにされた基督の名は今も尙世界の信仰を博してゐる。志を六國の間に得ずして窮死した孔子は千萬世の後、尙、道の師と仰がれてゐるではないか。自分のためにするのと、人のため社會のためにするのと、それだけの相異である。

中江藤樹の名は兒童も知つてゐるが、當時の諸大名の内、果して誰か今日まで名を傳えられる者があらう。

我々が基督たり、孔子たり、藤樹たりえることはむづかしい運動會にも百メートルの勝者もあれば、五百メートル、千メー

トルの競走に勝つ者もある。各々の宜敷に従ふべしである。各分に應じて社會國家のために盡すべきである。自分一身のためのみを考へるのは卑しむべきである。

下するにこの本は私自たふ何も書きてあいたやあいか。

雪三宅格言全集 終

大正六年九月十三日印刷  
大正六年九月十七日發行

定價金壹圓拾錢

編輯者 藤田信亮

發行者 石田彦三郎  
東京市本郷區元町二丁目二十二番地

印刷者 高嶺繁太郎  
東京市小石川區雜司ヶ谷町五十六番地

印刷所 高嶺堂印刷所  
東京市小石川區雜司ヶ谷町五十六番地

發行所

東京市本郷區元町二丁目  
振替口座東京一五七八〇番

中央出版社



顯本法華宗管長  
大僧正

本多日生猊下著

再版

### 日蓮主義研究講話

四六判三百五十頁  
本文總假名つき  
總布製箱入美本  
定價金壹圓二拾錢  
内地送料金八錢

本書は日蓮主義の普及を以て、畢生の天職とせる日生猊下が、該博蘊奥の思想を洗鍊なる金玉の文字に顯し、高遠幽邃なる日蓮の眞精神を何人にも消化し易き様縦横に説破せらる、言々悉く日蓮の思想たらざるなく、句々悉く是れ吾人が迷雲を一掃せらる、現今世界の近狀は吾人に本書の精讀を促すや切なり！

●日蓮主義研究者絶好唯一の羅針盤！

東洋大學々長大内青巒先生新著

再版

### 自ら救ふ力

四六判三百五十頁  
本文總假名つき  
總クロス箱入美本  
正價金壹圓貳拾錢  
内地送料金十二錢

本書は、失望の爲に、逆境の爲に、弱行の爲に、薄志の爲に、病身の爲に、煩悶懊惱する者に唯一の離脱法を示す、而も確乎たる信念と健全なる常識を養ひ、以て健忍不拔なる不斷の精力を得せしめ、人生の葛藤を截斷するに容易なるしむ、即ち森茫たる人生の大海に指針となり轉迷開悟の關鍵たるなり！

百折不撓の精神！ 永遠的不斷の精力は人生最後の捷利たるなり、本書は此間の機微を説いて餘蘊なし！